伝えたい想い
ふるさと岩手の未来へ

伝えたい想い　ふるさと岩手の未来へ　東日本大震災から10年　被災地復興のいま　一般社団法人　岩手県建設業協会

東日本大震災から10年
被災地復興のいま

一般社団法人　岩手県建設業協会

伝えたい想い
ふるさと岩手の未来へ

東日本大震災から10年

被災地復興のいま

発刊に当たって

一般社団法人 岩手県建設業協会
会長　向井田　　岳

東日本大震災の発生から10年余りが経過しました。震災で犠牲になられた皆様に、謹んで哀悼の意を捧げますとともに、その御霊の安らかなることを、心よりご祈念申し上げます。

本県沿岸被災地においては、国土交通省と復興庁をはじめとする関係省庁、岩手県、沿岸市町村などのご指導のもと、復興道路・復興支援道路、津波防災施設、災害公営住宅などの社会基盤整備が着実に進み、「安全の確保」「暮らしの再建」「なりわいの再生」が実現しつつあります。本県建設産業が、被災地の復旧・復興に幾許かでもお役に立てたのであれば、地域づくりに携わる者の一人として望外の喜びです。

思えば10年前、本県建設産業関係者は発災直後より道路啓開、災害廃棄物の撤去、応急復旧などに、企業の壁や業態の壁を越えて取り組みました。そこには「使命感」といったきれい事では言い尽くせない、目の前の現実に真摯に向き合い、その場で成すべきことを成し遂げるという建設業の力、地域への思いがあったものと思い起こされます。

本復旧から復興に向かっては、「オール岩手」のスローガンを掲げ、建設産業が一丸となって取り組んでまいりました。震災前は公共投資が右肩下がりで過当競争も厳しい中にありましたが、被災された方々の平穏な暮らしの回復と安全で安心な地域の実現に、建設業としての力を発揮できたことは、ひとえに国や県、関係市町村のご当局のご指導、そして地権者や地域住民のご理解とご協力のたまものであると、改めて感謝申し上げます。

ハード整備としての復興事業は一段落しましたが、復興は未だ道半ばです。誰一人取り残さない郷土の復興とさらなる発展、安全で安心な地域づくりに向けて、県内建設業界として貢献してまいります。そして復興の最前線に立ち続けた者として、記憶と教訓を風化させることなく、その伝承に努めてまいります。

このたび、岩手県建設業協会では東日本大震災から10年を経て、本県沿岸部と建設業界のいまを伝える記録誌を発刊いたしました。地域建設業が復興まちづくりに果たした足跡と、復興にかける思い、そして、将来へ伝えたい教訓を感じ取っていただければ幸いです。

目　次

発刊に当たって　　一般社団法人岩手県建設業協会会長　向井田　岳 …… 1

第 1 章　写真でみる復興の今

安全の確保―まちづくり …… 4
―水門・防潮堤 …… 34
―復興道路・復興支援道路 …… 50
撮影場所地図 …… 65
暮らしの再建 …… 66
撮影場所地図 …… 79
なりわいの再生―地域振興 …… 80
―漁港 …… 87
撮影場所地図 …… 96

第 2 章　座談会　― 震災から10年　地域建設業のいまとこれから ―

震災10年を振り返る　協会三役・13支部長座談会 …… 98
震災から10年　若手経営者の思い、未来への挑戦　協会青年部座談会 …… 118

第 3 章　震災を伝える　― 教訓と想いを後世へ ―

震災を伝える　復興祈念公園 …… 126
震災遺構―後世に伝える …… 130

第 4 章　相次ぐ自然災害と向き合う　―「地域の守り手」として ―

台風10号、台風19号への対応 …… 138
新型コロナウイルスへの対応 …… 140
日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震への備え …… 141

第 5 章　次世代の建設業を担う若い力　― 僕たちの復興、これからのまちづくり ―

兼田建設㈱（久慈市）　植野和真さん …… 144
刈屋建設㈱（宮古市）　奥地裕介さん …… 145
㈱青紀土木（釜石市）　雲南勝志さん …… 146
豊島建設㈱（大船渡市）　村上渡さん …… 147
沿岸支部のタイムカプセル事業紹介 …… 148

「復興」そして「国土強靱化」へ…巻末の辞に代えて …… 149

第1章
写真でみる復興の今

安全の確保―まちづくり

〔陸前高田市〕　区画整理された今泉地区（2021年4月7日撮影）①

写真説明末尾の番号は撮影地。65ページ地図を参照

〔陸前高田市〕　市中心部のかさ上げ地には新たな市街地が形成された（2021年６月12日撮影）②

〔陸前高田市〕　住宅地や学校、病院が整備された高田地区の高台エリア（2020年10月31日撮影）③

〔陸前高田市〕　今泉地区の区画整理事業。右端は三陸沿岸道路（2020年10月18日撮影）④

〔陸前高田市〕　長部地区（月山）の防災集団移転促進事業と、そばを通る三陸沿岸道路（2020年11月１日撮影）⑤

〔陸前高田市〕　防災集団移転促進事業が導入された脇の沢団地（2020年11月１日撮影）⑥

〔陸前高田市〕　道路や高台に宅地が整備された竹駒地区（2020年11月１日撮影）⑦

〔陸前高田市〕　防災集団移転促進事業の広田大野団地。団地沿いには高台に県道が整備された（2021年６月27日撮影）⑧

〔陸前高田市〕　防災集団移転促進事業の中沢団地（左下）と、山側に振り替えられた県道（2021年６月27日撮影）⑨

〔大船渡市〕　区画整理などが実施された大船渡駅周辺地区（2021年４月11日撮影）⑩

〔大船渡市〕　中心市街地が形成された大船渡駅周辺（2020年11月12日撮影）⑪

〔大船渡市〕　防災集団移転促進事業の下舘下団地（2021年６月28日撮影）⑫

〔大船渡市〕　高台に整備された東朋中学校（手前）や赤崎小学校と、高台に整備された県道（2021年６月28日撮影）⑬

〔大船渡市〕　永浜地区防災集団移転住宅団地と、山側に振り替えられた県道（2021年６月28日撮影）⑭

〔大船渡市〕　防災集団移転促進事業が導入された峰岸地区。山側には県道が振り替えられている。奥の細浦漁港では起伏式フラップゲートの水門が整備されている（2021年７月25日撮影）⑮

〔大船渡市〕　泊里地区の災害公営住宅（手前）と防災集団移転促進事業。右側は山側に改築されている県道（2021年８月５日撮影）⑯

〔大船渡市〕　平林地区の災害公営住宅（手前中央）。海側隣には小河原地区の防災集団移転促進事業団地が広がる（2021年８月５日撮影）⑰

〔大船渡市〕　高台に小学校などを再建した越喜来地区。学校周辺には防災集団移転促進事業団地が整備された（2021年８月５日撮影）⑱

〔大船渡市〕　崎浜地区の災害公営住宅と防災集団移転促進事業（2021年８月５日撮影）⑲

〔釜石市〕　鵜住居地区の土地区画整理事業。左は釜石鵜住居復興スタジアム（2021年７月24日撮影）⑳

〔釜石市〕　災害公営住宅などが立ち並ぶ市中心部（2021年４月12日撮影）㉑

〔釜石市〕　土地区画整理事業などが実施された平田地区（2021年７月24日撮影）㉓

〔釜石市〕　市中心部の海沿いには山側への避難路（赤茶色部分）を整備（2020年11月15日撮影）㉒

〔釜石市〕　区画整理された嬉石松原地区（奥）と、甲子川水門（2020年11月15日撮影）㉔

〔釜石市〕　鵜住居地区の土地区画整理事業（2020年11月12日撮影）㉕

〔釜石市〕　高台に復興団地や市道が整備された根浜地区。右下にはキャンプ場などレクリエーション施設が再建された（2021年８月７日撮影）㉖

〔釜石市〕　本郷地区の防災集団移転促進事業団地（2021年４月７日撮影）㉗

〔釜石市〕　高台に防災集団移転促進事業団地や学校が整備された小白浜地区（2021年７月23日撮影）㉘

〔大槌町〕　区画整理などが実施された町中心部・町方地区（2020年10月27日撮影）㉙

〔大槌町〕　区画整理などを実施した安渡地区（2020年12月５日撮影）㉚

〔大槌町〕　区画整理された吉里吉里地区（2021年６月５日撮影）㉝

〔大槌町〕　区画整理などを実施した赤浜地区（2020年11月５日撮影）㉛

〔大槌町〕　吉里吉里地区の防災集団移転促進事業団地（2021年７月23日撮影）㉞

〔大槌町〕　防災集団移転促進事業で整備された寺野臼澤団地（2021年７月17日撮影）㉜

〔大槌町〕　砂浜の再生が進む浪板地区（2021年７月24日撮影）㉟

〔山田町〕　町中心部となる山田地区の復興まちづくりの状況。町内最大の災害公営住宅の山田中央団地や商業施設、産業施設などを望む（2021年６月30日撮影）㊱

〔山田町〕　山田地区の公共防災エリアに整備された県立山田病院や山田消防署、高台部の住宅団地（2021年7月30日撮影）㊲

〔山田町〕　織笠地区低地部のかさ上げエリア。奥側は防災集団移転促進事業エリア（2021年5月26日撮影）㊳

〔山田町〕　船越地区の高台団地（2021年7月30日撮影）㊴

〔山田町〕　高台団地の整備などが実施された織笠地区（2021年7月30日撮影）㊵

〔山田町〕　区画整理が実施された大沢地区（2021年8月7日撮影）㊶

〔宮古市〕　区画整理や高台移転などが実施された田老地区。漁業活動への影響や背後用地の利用形態等を考慮し、直立堤と傾斜堤の両方を採用している（2021年６月18日撮影）㊷

〔宮古市〕　区画整理が実施された鍬ケ崎・光岸地地区（2021年７月20日撮影）㊸

〔岩泉町〕　復興まちづくりが実施された小本地区。中央には小本地区津波防災センターが見える
（2020年12月９日撮影）㊹

〔田野畑村〕　被災者の住宅が整備された黎明台団地（2020年12月９日撮影）㊺

〔野田村〕　土地区画整理事業や災害公営住宅の建設などが実施された村中心部の城内地区（2021年６月14日撮影）㊻

〔野田村〕　村が防災集団移転促進事業で整備した新町団地
（2020年12月８日撮影）㊼

安全の確保―水門・防潮堤

〔大槌町〕　町中心部を守る大槌川水門（右）と小鎚川水門（左）（2021年6月5日撮影）48

〔陸前高田市〕　防潮堤や水門、津波復興祈念公園などが整備された高田松原地区（2021年7月18日撮影）49

〔陸前高田市〕　脇之沢漁港周辺の防潮堤（2021年6月27日撮影）50

〔陸前高田市〕　勝木田海岸の防潮堤（2021年6月13日撮影）51

〔陸前高田市〕　要谷漁港海岸の新たな防潮堤に設置された陸閘。自動閉鎖システムが導入されている（2020年7月29日撮影）52

〔陸前高田市〕　只出漁港の防潮堤（2021年6月15日撮影）53

〔大船渡市〕　門の浜漁港の防潮堤（2021年6月30日撮影）54

〔大船渡市〕　農地海岸保全施設災害復旧事業の合足地区防潮堤
（2021年7月16日撮影）55

〔大船渡市〕　越喜来地区の防波堤（2020年11月12日撮影）56

〔大船渡市〕　吉浜海岸の防潮堤（2020年10月14日撮影）57

〔釜石市〕　片岸海岸防潮堤と鵜住居川水門（2021年7月24日撮影）58

〔釜石市〕　小白浜地区の防潮堤や水門（2020年11月19日撮影）59

〔釜石市〕　箱崎地区の防潮堤と、背後のまちづくり（2021年7月17日撮影）60

〔山田町〕　織笠川水門の整備状況（2021年5月26日撮影）64

〔釜石市〕　下荒川地区の防潮堤
（2021年7月23日撮影）61

〔釜石市〕　甲子川水門（2021年7月24日撮影）62

〔山田町〕　船越漁港で施工中の防潮堤。写真右奥には、高台に移転された船越小学校が見える（2021年7月30日撮影）65

〔大槌町〕　吉里吉里地区の防潮堤など（2021年8月19日撮影）63

〔山田町〕　整備が進められる関口川水門
（2021年5月18日撮影）66

〔山田町〕　浦の浜地区に整備された防潮堤
（2021年5月26日撮影）67

〔宮古市〕　岩手県が2026年度完成を目標に整備を進める閉伊川水門。背後には市中心部が見える
（2021年７月20日撮影）68

〔宮古市〕　防潮堤が整備された鍬ケ崎地区（2021年5月18日撮影）69

〔宮古市〕　田代川水門（2021年6月18日撮影）70

〔宮古市〕　摂待水門の現場見学会の様子（2021年1月24日撮影）71

〔岩泉町〕　小本地区では水門背後に防潮堤（山付堤）が整備された
（2021年6月2日撮影）72

〔田野畑村〕　島の越漁港で進む水門、防潮堤整備の様子
（2021年6月18日撮影）73

〔普代村〕　東日本大震災時に村中心部への津波被害を食い止めた普代水門。写真奥側には三陸沿岸道路「普代道路」が見える（2020年12月8日撮影）74

〔普代村〕　太田名部地区の防潮堤
（2021年6月30日撮影）75

〔野田村〕 野田地区の水門・防潮堤（2021年６月14日撮影）76

〔野田村〕 米田地区の水門・防潮堤（2021年６月14日撮影）77

〔久慈市〕 堤防かさ上げが施された夏井川（2020年12月８日撮影）78

〔久慈市〕 久慈湊地区でかさ上げされた防潮堤（2021年６月14日撮影）79

〔久慈市〕 久慈川の河川堤防かさ上げ工事などが進む（2020年12月８日撮影）80

〔久慈市〕 かさ上げ整備された久喜漁港の防潮堤（2021年７月20日撮影）81

〔洋野町〕 震災津波の災害復旧が完了した平内海岸、川尻川水門（2021年７月20日撮影）82

〔洋野町〕 八木地区に整備された防潮堤や八木港（2021年７月20日撮影）83

〔釜石市〕　復旧された釜石港湾口防波堤（釜石港湾事務所提供・2018年３月24日撮影）84

〔宮古市〕
宮古港の竜神崎防波堤（2021年８月19日撮影）85

〔久慈市〕　久慈港湾口防波堤の南堤が概成（蓋コンクリートの打設作業）（2016年６月１日撮影）86

〔久慈市〕　久慈港湾口防波堤の南堤が概成（2016年６月１日撮影）87

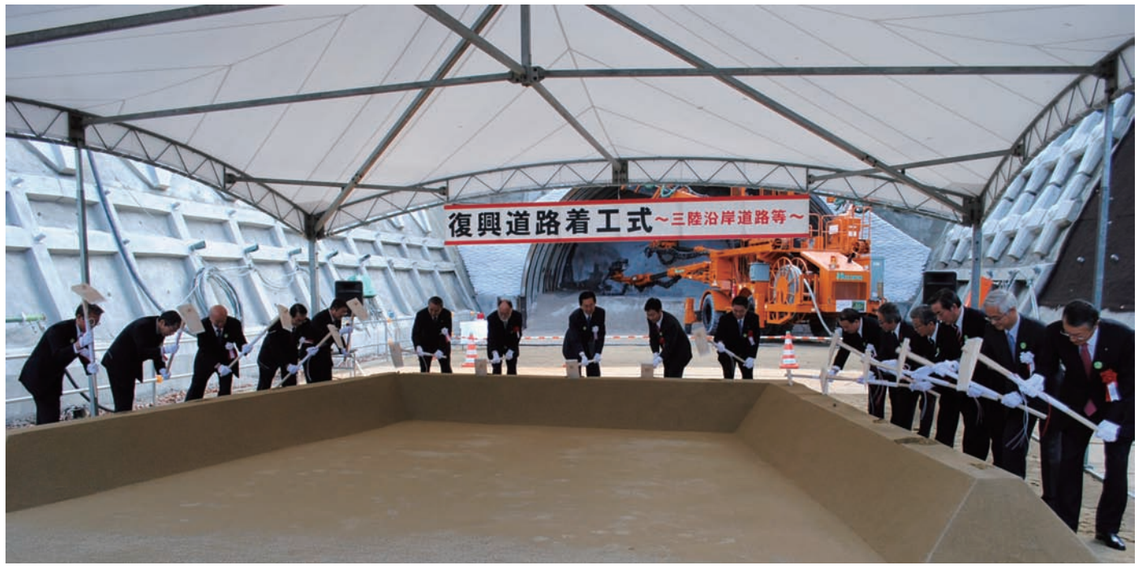
〔釜石市〕　釜石港湾口防波堤開口部の逆Ｔ型ブロック設置（2015年２月11日撮影）88

〔大船渡市〕　大船渡港湾口防波堤１函目据え付け（2013年５月８日撮影）89

〔大船渡市〕　復旧された大船渡港湾口防波堤（2017年３月13日撮影）90

安全の確保―復興道路・復興支援道路

2019年１月12日開通　三陸沿岸道路「釜石山田道路」の大槌インターチェンジ～山田南インターチェンジ[91]



〔田野畑村〕　三陸北縦貫道路「尾肝要道路」の尾肝要トンネル北工区の工事着手に合わせ行われた復興道路着工式（2011年11月20日撮影）92

〔宮古市〕　三陸沿岸道路・宮古市松山～崎山区間での測量・地盤調査説明会（2011年11月27日撮影）93

〔宮古市〕　三陸沿岸道路・宮古市松山～田老区間での中心杭設置式（2011年12月23日撮影）94

〔釜石市〕　南三陸国道事務所開所式（2012年４月９日撮影）95

〔釜石市〕　国道283号釜石花巻道路・釜石～釜石西間の「即年着工」起工式（2012年11月４日撮影）96

2013年10月13日開通　三陸沿岸道路「普代道路」の開通式典 97

2014年３月２日開通　三陸沿岸道路「尾肝要道路」の尾肝要トンネル坑口前 98

2014年３月23日開通　三陸沿岸道路「高田道路」の陸前高田インターチェンジ 99

2015年11月29日開通　三陸沿岸道路「吉浜道路」の吉浜高架橋 ⑩⓪

2017年11月19日開通　震災後事業化の区間で初の開通となった三陸沿岸道路「山田宮古道路」の山田北ＩＣ付近 ⑩①

2018年３月21日開通　三陸沿岸道路「田老岩泉道路」の新小成橋、岩泉南ＩＣ付近 ⑩②

2018年７月28日開通　三陸沿岸道路「唐桑高田道路」の気仙川大橋と今泉トンネル ⑩③

2018年８月11日開通　三陸沿岸道路「吉浜釜石道路」の釜石南インターチェンジ。奥は新鍬台トンネル ⑩④

2019年３月９日開通　三陸沿岸道路「釜石山田道路」の釜石ジャンクション周辺 ⑯

2019年３月９日開通　三陸沿岸道路「吉浜釜石道路」の釜石唐丹インターチェンジ。左上は篠倉山トンネル ⑰

2019年３月９日開通　三陸沿岸道路「釜石山田道路」の釜石中央インターチェンジ ⑯

2019年３月９日開通　釜石仙人峠インターチェンジから釜石ジャンクションに向かって伸びる東北横断自動車道釜石秋田線 ⑱

2019年３月21日開通　三陸沿岸道路「唐桑高田道路」唐桑小原木インターチェンジ～陸前高田長部インターチェンジ（岩手県内区間）⑲

2019年６月22日開通　三陸沿岸道路「釜石山田道路」の大槌インターチェンジ周辺。右下のインター降り口には消防署や災害公営住宅が整備されている ⑩

2020年３月１日開通　三陸沿岸道路「久慈北道路」の鳥谷高架橋付近を望む ⑪

2020年７月12日開通　三陸沿岸道路「宮古田老道路」（奥側は宮古市街地）⑫

2020年７月12日開通　三陸沿岸道路「宮古田老道路」の閉伊川大橋 ⑬

2020年12月19日開通　三陸沿岸道路「田野畑北ＩＣ～普代」間の本線部 ⑭

2021年７月10日開通　三陸沿岸道路「田野畑道路」の思惟花笑み大橋 ⑯

2021年３月20日開通　三陸沿岸道路「侍浜ＩＣ～洋野種市ＩＣ」間の開通区間（洋野宿戸ＩＣ付近を望む）⑮

2021年７月10日開通　三陸沿岸道路「田野畑道路」、右奥が道の駅たのはた ⑰

2020年12月５日開通　宮古盛岡横断道路の新区界トンネル ⑱

2021年３月28日開通　〔宮古市〕　宮古盛岡横断道路「川井～箱石」間の新箱石大橋と、奥側の片巣トンネル ⑲

2021年３月28日開通　宮古盛岡横断道路「蟇目～腹帯」間の腹帯大橋と、奥側の腹帯清水トンネル ⑳

〔陸前高田市〕　県がかさ上げ整備した主要地方道大船渡広田陸前高田線小友地区（2020年11月１日撮影） ㉑

〔住田町〕　気仙川沿いに県が整備した一般国道340号山谷工区（2021年６月13日撮影） ㉒

2017年３月25日開通　〔大船渡市〕　県が整備した主要地方道大船渡綾里三陸線小石浜地区の恋し浜トンネル ㉓

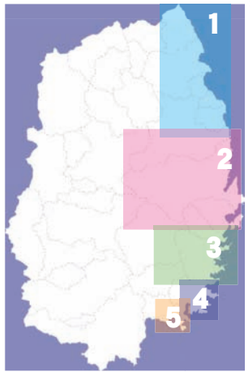
2014年10月26日開通　〔住田町〕　県が復興支援道路として整備した一般国道397号津付道路 ㉔

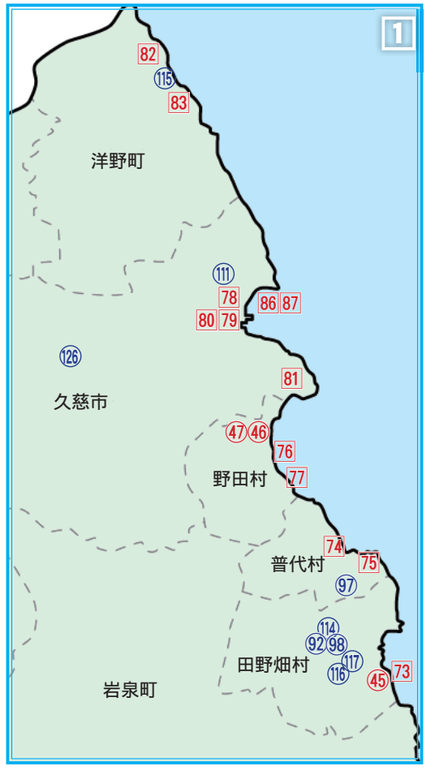
2016年12月11日開通　国道340号立丸峠の小峠工区の開通式（立丸第二トンネルの坑口前）㉕

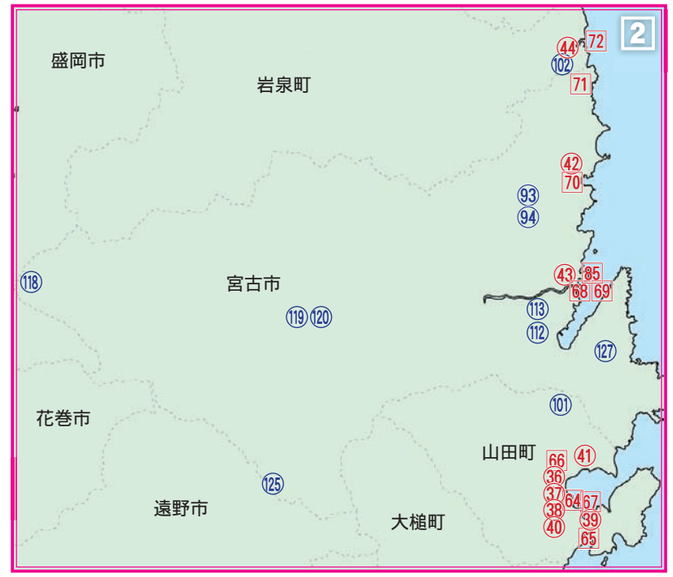
2017年11月19日開通　国道281号案内地区の開通記念の通り初め ㉖

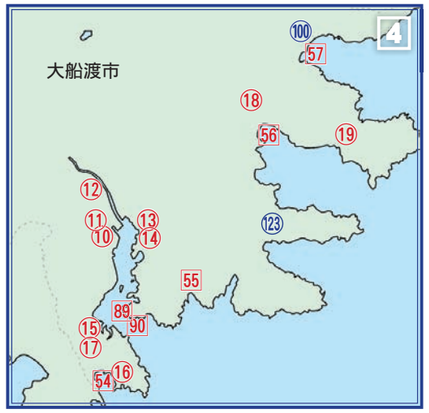
2019年3月16日開通　主要地方道重茂半島線で山間部に架かる熊の平大橋 ㉗

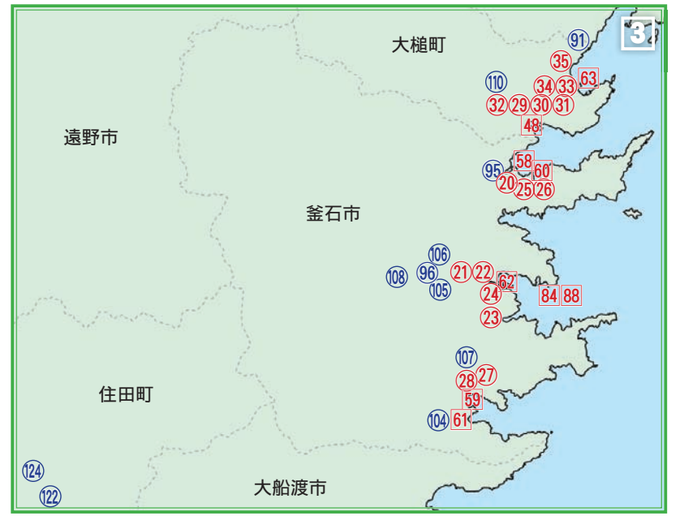
安全の確保

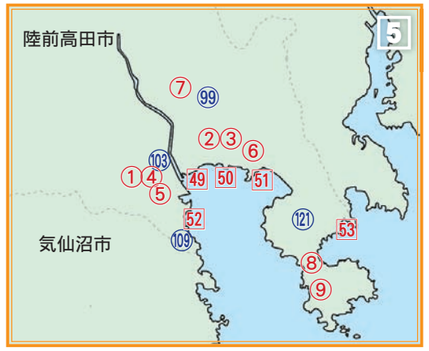












暮らしの再建

〔陸前高田市〕　栃ケ沢地区の災害公営住宅（右下）。隣には市コミュニティホールや消防署も整備された
（2021年７月25日撮影）①

写真説明末尾の番号は撮影地。79ページ地図を参照

〔陸前高田市〕　博物館（中央手前）や市民文化会館（中央奥）をはじめ、図書館、商店街、コミュニティ施設などが整備された陸前高田市中心部（2021年７月25日撮影）②

〔陸前高田市〕　高田地区中心部に整備された市役所庁舎（左上）と下和野災害公営住宅（2021年６月27日撮影）③

〔陸前高田市〕　高田松原運動公園（2021年６月27日撮影）④

〔陸前高田市〕　高台に高田小学校（手前）や県立高田病院（右上）、市保健福祉総合センター（中央奥）などを集積整備（2020年11月11日撮影）⑤

〔陸前高田市〕　市民文化会館（奇跡の一本松ホール）（2021年７月18日撮影）⑥

〔陸前高田市〕　市コミュニティホール（2021年７月18日撮影）⑦

〔陸前高田市〕　高台に整備された高田東中学校（2020年11月26日撮影）⑧

〔陸前高田市〕　中心部高台に整備された市総合交流センター（夢アリーナたかた）（右）や、県立高田高校（中央上）、ホテル（手前）（2020年10月18日撮影）⑨

〔陸前高田市〕　市総合交流センター（夢アリーナたかた）（2020年11月11日撮影）⑩

〔陸前高田市〕　中田地区災害公営住宅（2021年７月28日撮影）⑪

〔陸前高田市〕　再建された野外活動センター。隣は防災集団移転促進事業の田谷団地（2021年６月26日撮影）⑫

〔大船渡市〕　高台に復旧された赤崎小学校や、こども園など（2021年６月28日撮影）⑬

〔大船渡市〕　市防災観光交流センター（おおふなぽーと）（2020年11月11日撮影）⑭

〔大船渡市〕　高台に再建された市防災センター（2021年６月28日撮影）⑮

〔大船渡市〕　災害公営住宅のみどり町アパート（2021年６月30日撮影）⑯

〔釜石市〕　釜石鵜住居復興スタジアム（2018年８月３日撮影）⑰

〔釜石市〕　天神地区の災害公営住宅（2016年６月11日撮影）⑱

〔釜石市〕　市民ホール（TETTO）
（2021年７月28日撮影）⑲

〔釜石市〕　再建された釜石警察署
（2019年８月２日撮影）⑳

〔釜石市〕　両石地区には、かさ上げ造成後、団地が整備された（2021年7月24日撮影）21

〔釜石市〕　高台を造成し整備された鵜住居小学校と釜石東中学校
（2021年8月19日撮影）22

〔釜石市〕　唐丹小・中学校（2021年7月23日撮影）23

〔大槌町〕　高台に整備された大槌学園（手前）（2020年10月27日撮影）24

〔大槌町〕　町文化交流センター（おしゃっち）
（2020年11月5日撮影）25

〔大槌町〕　大ケ口地区の災害公営住宅
（2020年10月27日撮影）26

〔大槌町〕　再建された県立大槌病院
（2016年4月27日撮影）27

〔大槌町〕　町中央公民館赤浜分館
（2020年12月2日撮影）28

〔山田町〕　山田中央団地の災害公営住宅（2020年12月25日撮影）29

〔山田町〕　県が高台に再建した県立山田病院（2021年5月26日撮影）30

〔山田町〕　高台に再建された船越小学校（2016年2月11日撮影）31

〔宮古市〕　防災まちづくりの中核施設として整備した中心市街地拠点施設「イーストピアみやこ」（2018年9月2日撮影）32

〔宮古市〕　区画整理が実施された鍬ケ崎・光岸地地区に災害公営住宅などが建設された。ラウンドアバウト（環状の交差点）も設けられている（2021年7月20日撮影）33

〔宮古市〕　市が赤前地区で再建した宮古運動公園（野球場、陸上競技場）や県が整備した防潮堤（2021年6月30日撮影）34

暮らしの再建

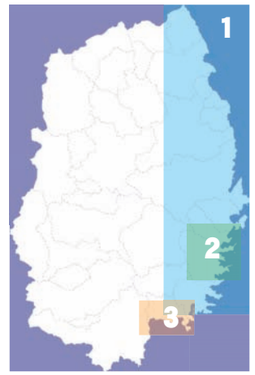
〔岩泉町〕　町が津波浸水エリア外に移転整備した小本小中学校（2016年２月４日撮影）35

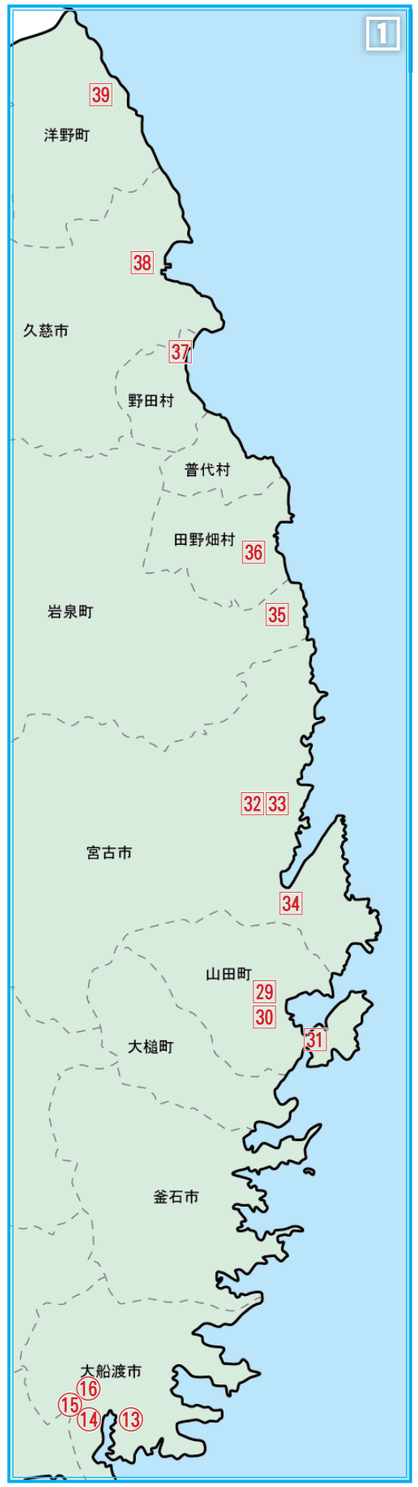
〔田野畑村〕　道の駅たのはた「思惟の風」のオープン式典
（2021年４月22日撮影）36

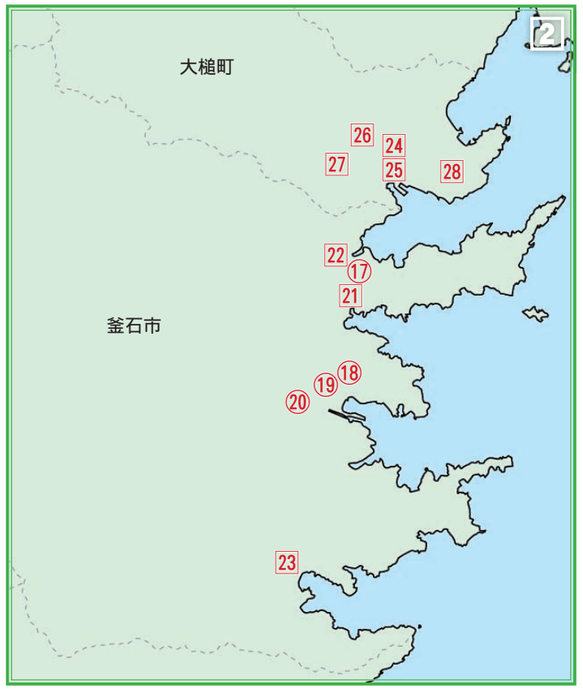
〔野田村〕　村中心部の土地区画整理事業区域内に、保健福祉活動や防災の拠点として建設された保健センター（2020年10月13日撮影）37

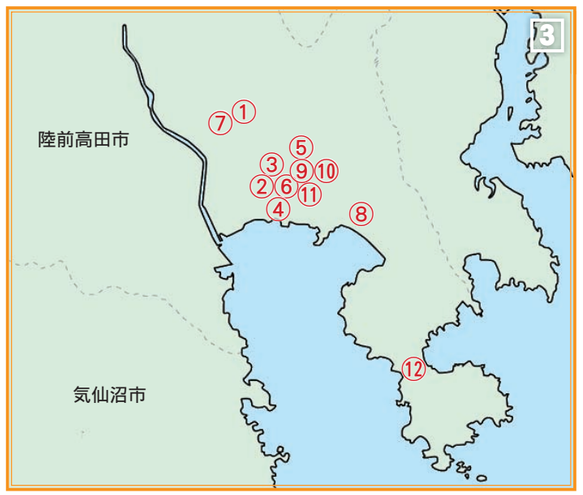
〔久慈市〕　夏井地区などに整備され、災害時に一時避難場所や復旧・支援活動の拠点となる総合防災公園（2021年６月14日撮影）38

〔洋野町〕　八木地区に整備された防災センター
（2021年７月20日撮影）39









なりわいの再生―地域振興

〔陸前高田市〕　被災した小友地区のほ場整備エリアとＢＲＴ（2021年6月30日撮影）①

写真説明末尾の番号は撮影地。96ページ地図を参照

〔陸前高田市〕　高田地区の中心市街地（2021年６月12日撮影）②

〔陸前高田市〕　中心商店街「アバッセたかた」と、市立図書館（2021年７月25日撮影）③

〔陸前高田市〕　中心市街地でのまちびらき（2018年９月30日撮影）④

〔陸前高田市〕　高田松原では砂浜を再生。マツの苗木も植樹された（2021年７月18日撮影）⑤

〔陸前高田市〕　今泉地区には、㈱醸（カモシー）が商業施設「陸前高田発酵パークＣＡＭＯＣＹ」をオープン（2020年12月17日撮影）⑥

〔大船渡市〕　中心商店街を形成するキャッセン大船渡（2021年６月30日撮影）⑦

〔大船渡市〕　大船渡駅周辺の中心市街地（2020年11月13日撮影）⑧

〔釜石市〕　再建された魚市場や、新設のにぎわい施設。背後地には水産加工企業が工場を整備した（2021年７月24日撮影）⑨

〔釜石市〕　ガントリークレーンが設置された釜石港公共ふ頭。奥に湾口防波堤が見える（2020年11月15日撮影）⑩

〔釜石市〕　釜石ふ頭でのガントリークレーン供用開始式（2017年９月23日撮影）⑪

〔釜石市〕　砂浜が再生された根浜海岸（2021年８月７日撮影）⑫

〔大槌町〕　おおつち地場産業活性化センター（2021年７月24日撮影）⑬

〔宮古市〕　田老地区の再生のシンボルとなる道の駅たろう（2020年７月３日撮影）（供用開始そのものは2018年３月９日）⑭

〔宮古市～釜石市〕　三陸鉄道「リアス線」開通記念式典の当日に宮古駅に到着した記念列車（2019年３月23日撮影）。これで、以前の南北リアス線と、ＪＲ東日本から移管されたＪＲ山田線（宮古駅～釜石駅間）を合わせ、「リアス線」として一体的な運行を開始した⑮

〔宮古市〕　機能強化が図られた魚市場や、市街地を守るための閉伊川水門を望む（2021年７月20日撮影）⑯

〔岩泉町〕　浜の駅おもと愛土館（2020年12月９日撮影）⑰

〔田野畑村〕　復旧整備された羅賀作業保管施設（2020年12月７日撮影）⑱

〔普代村〕　普代水門前に整備された浜の産直きらうみ（2021年６月30日撮影）⑲

〔野田村〕　村の特産品のホタテをイメージした展望・休憩施設「ほたてんぼうだい」（2020年10月13日撮影）⑳

〔久慈市〕　市が再建した地下水族科学館「もぐらんぴあ」（2020年11月25日撮影）㉑

〔洋野町〕　客船をイメージした「ひろの水産会館ウニーク」（2016年１月28日撮影）㉒

なりわいの再生―漁港

〔陸前高田市〕　脇之沢漁港（2020年11月１日撮影）㉓

〔陸前高田市〕　六ケ浦漁港（2021年６月26日撮影）㉔

〔陸前高田市〕　防潮堤などが整備された要谷漁港
（2021年７月18日撮影）25

〔陸前高田市〕　長部漁港
（2021年６月11日撮影）26

〔陸前高田市〕　両替漁港。奥は農地海岸保全施設災害復旧事業の小友地区
（2020年11月１日撮影）27

〔陸前高田市〕　広田漁港
（2020年11月16日撮影）28

〔大船渡市〕　蛸ノ浦漁港
（2021年６月28日撮影）29

〔大船渡市〕　綾里漁港
（2021年７月16日撮影）30

〔大船渡市〕　越喜来地区・
泊漁港と越喜来漁港
（2020年10月14日撮影）31

〔大船渡市〕　崎浜漁港
（2021年８月５日撮影）32

〔釜石市〕　両石漁港
（2021年７月24日撮影）33

〔釜石市〕　花露辺漁港
（2021年７月23日撮影）34

〔釜石市〕　小白浜漁港
（2021年７月23日撮影）35

〔大槌町〕　大槌漁港
（2020年６月５日撮影）36

〔山田町〕　復旧した山田漁港や整備された防潮堤、関口川水門、かさ上げされた国道45号など
（2021年６月30日撮影）37

〔山田町〕　織笠漁港、漁港背後には高台団地が見える
（2021年５月26日撮影）38

〔山田町〕　防潮堤の整備などが進む船越漁港。高台には防災集団移転促進事業による住宅団地が見える39
（2021年８月19日撮影）

〔宮古市〕　田老漁港の防潮堤や津波避難誘導デッキ
（2021年６月18日撮影）40

〔宮古市〕　重茂漁港
（2021年６月30日撮影）41

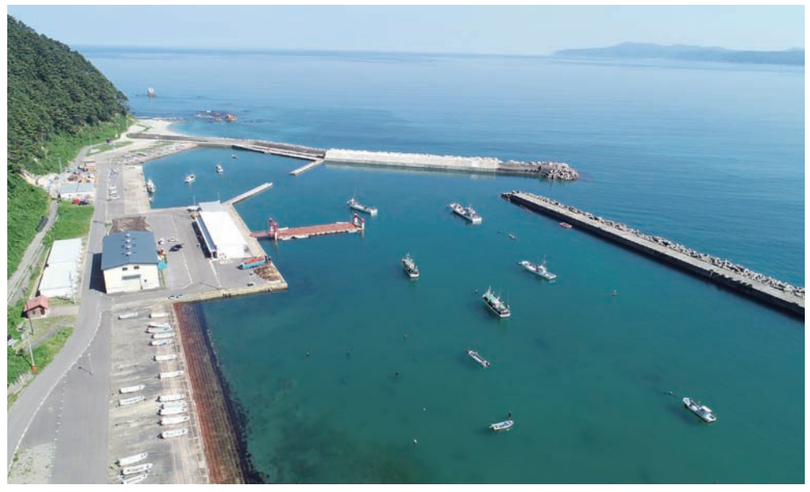
〔岩泉町〕　小本漁港
（2021年６月30日撮影）42

〔田野畑村〕　島の越漁港や津波避難誘導デッキを望む
（2021年６月30日撮影）43

〔田野畑村〕　平井賀漁港
（2021年６月18日撮影）44

〔普代村〕　太田名部漁港
（2021年６月30日撮影）45

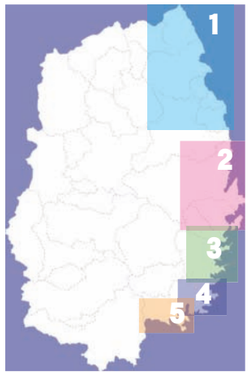
〔野田村〕　野田漁港
（2021年６月14日撮影）46

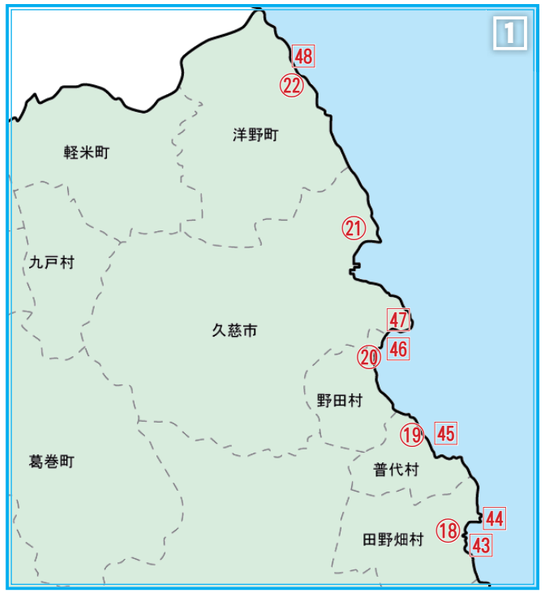


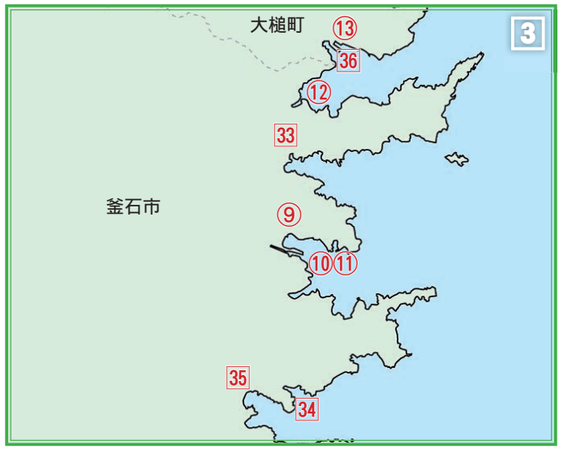
〔久慈市〕　久喜漁港
（2021年７月20日撮影）47

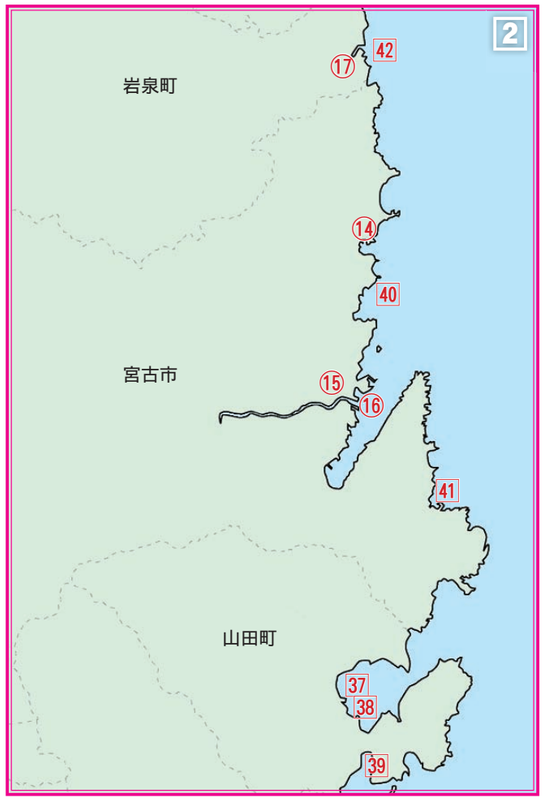
〔洋野町〕　種市漁港
（2021年７月20日撮影）48

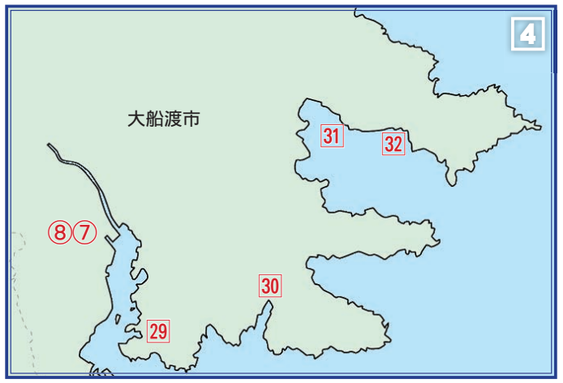
なりわいの再生

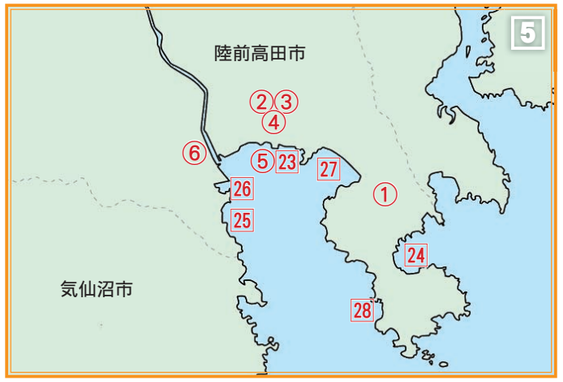












第2章
座談会

―震災から10年　地域建設業のいまとこれから―

岩手県建設業協会座談会

震災10年を振り返る

日時　2021年４月16日㈮
　　13時30分～16時30分
場所　アートホテル盛岡

参加者

会長	向井田　岳（進行）
副会長	海野　尚
副会長	小原　志朗
副会長	三浦　貞一
副会長	森田　敏雄
副会長	佐藤　東
盛岡支部長	遠藤　忠志
花巻支部長	菅原　陽一
遠野支部長	阿部　則勝
北上支部長	八重樫　博之
奥州支部長	及川　晃一
一関支部長	須田　光宏
千厩支部長	小山　裕昭
大船渡支部長	紀室　裕哉
釜石支部長	八幡　康正
宮古支部長	大坂　文人
岩泉支部長	熊谷　朋之
久慈支部長	税田　英敏
二戸支部長	坂本　昌彦

（敬称略）

2011年３月14日　緊急支部長会議開催。全県を４ブロックに分け、復旧対応で内陸支部が沿岸支部を支援する体制を決める。（出席者：宇部貞宏会長、木下紘副会長、佐々木陸夫副会長、船野富士彦花巻支部長、小原志朗北上支部長、佐々木利幸水沢支部長、三浦貞一遠野支部長、柴田慶三二戸支部長、山本博専務理事、県土整備部若林治男技監）

４月21日　宇部会長、木下副会長、向井田副会長らが宮古、釜石、大船渡各支部を訪問し、見舞金を贈呈

３月11日夕刻　決壊寸前の久慈川（久慈支部）

東日本大震災発災直後の状況
沿岸部各地域での対応

向井田　東日本大震災から10年が経過しました。十年一昔と言いますが、振り返るとあっという間の10年間だったのではないでしょうか。復興需要の終了に合わせて工事量の激減が見込まれており、阪神淡路大震災の復興需要が過ぎた後、地元企業の多くが倒産・廃業に追い込まれたという苦い経験もあります。これら他地域の事例も他山の石としながら、これからの岩手の建設業界を考えなければなりません。

ただし復興は10年で終わるものではありません。また「防災・減災、国土強靱化のための５か年加速化対策」がスタートし、復興から国土強靱化へのシフトも始まっています。これまでの協会の取り組みを振り返ることで過去の教訓から学び、将来の建設業界のため、そして岩手県民のために私たちに何ができるかを考えたいと思います。まずは沿岸部の支部長さん方から、発災直後の状況や各地域での対応について振り返ってください。

税田　発災の瞬間、私は盛岡市内におり国道４号を北に向かって進んでいる最中でした。通信網は麻痺していましたが、情報はラジオで得ることができました。久慈に戻ると、市街地には大きな被害はなく、川崎町にある会社も無事でした。

12日の早朝に県北広域振興局を訪問して対応を協議しましたが、大津波警報が発令中だったため、その段階では具体的な行動には至りませんでした。支部が災害協定に基づき出動したのは、注意報に切り替わった13日の午前中からです。この間にも野田村の被害が大きいと聞き、山道を通って私と副支部長とで現

自衛隊との打ち合わせ（宮古支部）

３月19日　北上支部（小原志朗支部長）、花巻支部（船野富士彦支部長）が釜石支部（青木正紀支部長）を訪問し、情報収集と支援物資を搬入

山田町での道路啓開作業

地の調査に入りましたが、とにかく大変な状況だったことを覚えています。現地での道路啓開や廃棄物撤去などの対応は、野田村地域整備協会が中心となり、ほかにも洋野町や普代村など地元企業が中心に対応しました。

大坂　３月11日の午後、私は宮古市内で散髪中でした。

とてつもなく大きな長い揺れに大津波の襲来を直感し、散髪を中断して「この店まで間違いなく津波は来るから、早く逃げろ」と言って、会社に戻りました。社員には「閉伊川が逆流すれば１階は危険だから、最悪２階に避難しろ」と伝え、私は山沿いの迂回路を使って稼働中の海の現場を見に急ぎました。蛸の浜大橋の橋脚脇にジープを止めた私の目に入った光景は、第一波が押し寄せた海水面上昇の痕跡です。想像を絶する高さまでくっきりと残り、まだ水が滴っており恐ろしい姿でした。

私から右下に見える鍬ケ崎は３分の２が壊滅し、沖に面する左下方の蛸の浜漁港港内は引き潮のため海底が露出していました。モーセの十戒の海面を割ったシーンが脳裏に浮かんだのですが、現実の光景は山のように積み上げられているはずの消波堤体施設が無くなり、これでもかというほど散乱した消波ブロックと防波堤本体が海底に露出し立っているという異様な光景でした。内湾側に当たる鍬ケ崎の赤灯台の防波堤は１函10㍍で重さが2000㌧のケーソンを40函並べて、全長約400㍍あるのですが、取付け側から20函が第一波襲来時に転倒していました。堤体背後で作業していた自社の起重機船は糸の切れた凧のようになっていました。

市役所近くのＮＴＴの建物も浸水し、携帯電話も不通。社員の安否確認も出来ず心中は穏やかでありませんでした。日没後も小雪が舞い散る中、沖合に避難した数10隻の避難船の燈火を眺め、国民休暇村近くの崖っぷちに日の出近くまで立っていました。不幸中の幸いだったことは、全員ケガもなく無事だったことです。そのような中、支部の会員会社は国・県・市との防災協定の下、早い段階から行政の依頼を受け、個別に道路啓開等に対応していました。初日こそ組織的な対応には至らなかったものの、各地区で多くの支部会社が頑張っていたことは評価していただきたいです。

熊谷　東日本大震災の２日前に発生した地震で津波注意報が出された際、三陸国道事務所からの依頼で小本地区に下りる道路の通行止めを掛ける準備をした後でした。３月11日の大津波警報を受けて現地に向かった時には、すでに津波の被害が発生していました。

町内は停電しており、ガソリンスタンドでの給油は手動の手回しポンプを使いました。１㍑入れるのに１分ほどかかるため、20㍑の給油も一苦労です。燃料の供給はずっと問題になっており、バックホーをフル稼働させようにも、バックヤードはないし燃料もない。弊社が経営しているガソリンスタンドには、前日たまたまタンクローリーが入っており、満タンだったことが不幸中の幸いでした。

八幡　釜石支部では、災害発生時には支部会館に集まる約束事ができていました。発災当日の夜から被災していない会員が情報収集に当たり、翌日には支部会員の大半が集まりました。支部会員の安否や各地の被災状況を整理して振興局に情報提供するとともに、自衛隊や警察の指示に合わせて、道路啓開や災害廃棄物の撤去などに当たりました。

仕事自体の大変さよりも、避難所で私たちに向けられる目の厳しさが辛かったです。ストレスや不安から避難所内は過敏なムードに

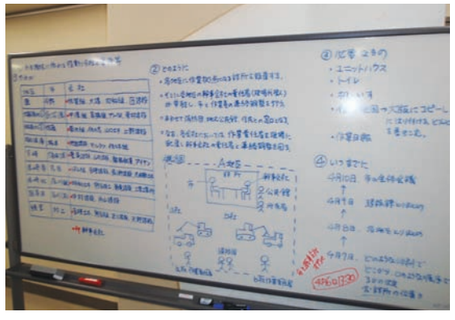
土木センターとの打ち合わせ（岩泉支部）

３月23日大槌施工前

３月24日大槌施工後

３月11日津波直後（大船渡市）

地盤沈下した岸壁（大船渡市）



気仙地区災害復旧対策連絡協議会設置　打合せはホワイトボードで（大船渡支部）

なっており、仕事に行くことができる建設業関係者に対しては冷たい視線が向けられることもありました。災害廃棄物の集積に人手が必要なことや市役所の依頼もあり、漁業関係者にお手伝いをしてもらいました。災害廃棄物の撤去において、雇用面からも建設業のポテンシャルを発揮できたと思います。

紀室　大船渡市では、２日前の地震でも80㌢の津波が発生しています。３月11日の地震では電線が異常なほどのしなり方をするなど、２日前とは比較にならない揺れ方でしたが、多くの人は「せいぜい１㍍程の津波だろう」と思っていたようです。まずは社員を県立大船渡病院の高台に避難させ、私も避難しようと思った時には会社前の道路が一気に大渋滞です。大型ダンプの運転手さんが入れてくれたおかげで、何とか高台に避難することができました

避難した場所からは、想像を絶する速さで川が逆流していく様子や、２階建ての会社の屋根50㌢下まで津波が押し寄せている様子が見えました。広田半島が孤立状態となり、ほ場整備を担当していた社員の安否も不明でした。災害廃棄物を乗り越えながら、会社があった場所に戻った時には茫然自失の状態でした。

向井田　発災後の行政機関との連携状況はいかがでしたか。

紀室　ライフラインが寸断され、携帯も通じない状態でしたが、大船渡市は市役所、警察署、振興局、県立病院がいずれも津波の被害を受けておらず、地震被害も最小限にとどまりました。翌12日には市役所、警察、自衛隊、消防、支部で捜索班を結成し、13日には道路啓開と応急復旧が本格的にスタートしています。一方の陸前高田市は市役所も被害を受けるなど、ほぼ全ての行政機能が麻痺したため、陸前高田市内の支部会員も、市建設業協会ともに、発災直後には組織だった動きが取れなかったようです。

４月２日に三陸国道事務所大船渡出張所、沿岸広域振興局、大船渡市、住田町、陸前高田市、支部とその他業界団体などで組織する「気仙地区災害対策連絡協議会」が発足し、管内全域での災害廃棄物撤去を本格化させています。それに先だって３月28日には一関支部と千厩支部から軽油2000㍑をいただき、改めて感謝申し上げます。

熊谷　連携に関する課題を申し上げれば、刻一刻と変化する状況に伴い、朝、夕方、また翌朝と、指示内容がどんどん変わっていきました。しかし携帯電話は通じず、一度山道を通ってから海側に出て、直接口頭で指示を伝えるしかなく、情報伝達のロスが非常に大きかったです。人命救助や行方不明者の捜索に合わせて作業場所は変わりますが、情報の錯綜によるロスもあり、道路啓開に特化した作業はできませんでした。

向井田　宮古地区では、大坂支部長がリーダーシップを取り、業種や官民の垣根を越えた連絡組織である「宮古地区災害復旧対策連絡協議会」を立ち上げましたね。

大坂　支部に加えて、水道・空調・電気・大工等の建設業界団体・振興局・市役所・商工会議所にも土日問わず参加いただき、情報共有を図るための協議会を16日に設置し、毎日16時から会議を開くこととしました。初会合の席で、私から各団体のトップに問わせていただいたことは「私たちは宮古で生まれ、生き、死んでいく人間だ。今、多くの宮古人たちが家を失い、避難所で苦しい生活を余儀なくされている。運良く今こうして生きている私達は、今日まで地元の皆さんに大なり小なり支えられ生かされてきたはず。この惨状に道を付けられるのは地元の我々だけだ。これまでは私たちはライバルだった。しかし今からは仲間であり兄弟だ。それが嫌だというなら、すぐにこの場を立ち去ってくれ」ということです。誰からも異論はなく、結束に拍車が掛かったと思います。

その初会合の直前、私が耳にしたのは、従業員の奥さんからの「重茂の現場に働きに行った夫が帰って来ない。探してほしい」という叫びでした。会議直前の事だったので、よほど気落ちが表情に出ていたのでしょうか、副支部長から声を掛けられました。それで我に返り、気持ちを入れ直すことができました。

現地で一人だけ生き残った人から聞いたことですが、揺れが落ち着いてから津波襲来までの時間は約40分ありました。完成検査間近の現場から重機を高台まで移動するのに15分かかるので、４台の車両で向かったところ、避難場所である小学校校庭と同等の高さの路上に集落の重鎮や、かつて共に働いた先輩たち15人ほどが海を眺めていたので、車から降りて雑談をしていたそうです。後日、偶然に大学生が小学校の屋上裏の路上から撮った映像を見ました。千鶏漁港港内の水位がゆっくりと約15分かけてパラペットの天端まで上昇し、直後に南側の防波堤付け根の海面が突然10㍍以上膨れ上がり、集落の奥の奥まで飲み込んでいきました。その間わずか10秒ほど。後で分かったことですが、千鶏集落は過去の津波で大きな被災実績は一度もない地区だったようです。

後に、宮古地区の業者は頑張り過ぎだとも言われましたが、社員が犠牲になった現実と意地がそうさせたのかもしれません。

内陸支部からの被災地支援

向井田　東日本大震災では、協会として「オール岩手」の理念で内陸部から沿岸部への支援を行いました。中でも遠野支部は、発災翌日より釜石方面に入り、道路啓開などに当たっています。

阿部　個人的な思いで恐縮ですが、10年の８月に社長に就任して半年ほどでの震災であり、大きな不安を抱えながらの対応でした。それでも当時支部長だった三浦貞一副会長の下、必要な機械類を用意して翌日の現地入りですから、いま振り返れば相当なスピード感での対応だったと思います。

現地では次の作業への指示内容がなかなか決まらず、ご遺体を見つけた社員もいました。苦労ばかりの現場でしたが、現地入りを拒む社員はおらず、みんな頑張ってくれました。遠野市内では発災直後は水道の復旧などを行ったのですが、次第にやることが無くなり、いかに社員の士気を落とさず会社を維持するかという悩みはありました。

三浦　遠野支部と土木センター、そして支部間のコミュニケーションがしっかりと取れていたことが大きかったと思います。官民の関係で言えば、釜石市鵜住居に派遣したチームに対して、土木センターから一定程度の判断を委ねていただきました。そして当時支部長だった釜石支部の青木正紀さん、花巻支部の船野富士彦さん、北上支部の小原志朗さんらと連絡を取り合い、遠野支部で対応できないことは他支部に依頼できました。これは普段からの飲み会も含めたコミュニケーションを通じて、フランクに相談できたことも大きかった。

当時の建設業界は公共事業の削減や過当競争の激化で、生きるか死ぬかの瀬戸際の状態ということもあり、当支部では会員企業の人員や車両、重機などの現状をピーク時との比較のため調査していました。一関支部の取り組みを参考にしたものですが、結果的に被災地支援のデータとして役立ちました。その面では普段からの備えの重要性を実感しました。

また支部では、作業員やオペレーター全員の声を残すための記録誌を作りました。その中ではきれい事ばかりではなく、ご遺体を見つけた職員の話も載っています。自衛隊や消防のように目立たなくても、建設業も本当に頑張った。何ら劣るものではなく、むしろ勝っていたとも思っていますし、協会として大事にしていくべきだと思っています。

向井田　このほかにも内陸支部からは道路啓開や被災地への支援物資の拠出など、幅広い支援を行いました。皆さんの被災地支援の様子をお聞かせください。

須田　一関市内も地震によって停電と断水が発生しました。情報はラジオから得ることができましたが、電気が回復したのは早くて４日後、遅いところは１週間後でした。岩手河川国道事務所一関出張所から国道45号の災害廃棄物撤去の依頼を受けて、13日に陸前高田市に重機を搬入し、14日から道路啓開に当たりました。大きな余震もあり、津波注意報も繰り返し出されていたので車のエンジンを掛けたまま待機させ、すぐに避難できるようにして作業に当たったと聞いています。

一関市内では、数多くあった全半壊の住宅の撤去、学校の表土を剥いで反転させる除染作業などを行いました。

５月11日
大坂建設の起重機船にこいのぼり「がんばれ岩手」（宮古支部）

佐藤　地震が起きたのは道路維持工事の現場から戻る最中、国道４号との交差点の手前でした。電柱が倒れるのではと思うぐらいの揺れ方で、会社に帰ってみるとブロック塀が倒れていました。担当地域のパトロールに当たりましたが、道路が通れなくなっている場所や下水道のマンホールが飛び出している箇所など、市内の被害も相当ありました。

一関市から支部に対してブロック塀撤去の依頼があり、当時の佐々木一嘉支部長からＣ級の会社で対応するよう指示をいただきました。Ｃ級は非会員も多いことから、会員企業が中心となり、必要に応じて非会員からお手伝をいただき撤去と処理を行いました。

小山　千厩地区では停電や通信網の途絶などがあり、発災後１週間ほどは身動きが取れない状態でした。土木センターからの支援依頼を受けて、一関市大東町と陸前高田市の境まで重機を運び待機をしていましたが、この時点ではゴーサインは出されませんでした。陸前高田市への本格的な支援開始は４月25日からです。当初は13社27人体制だったものを、ピーク時には16社60人体制で、お盆前まで災害廃棄物の撤去に当たりました。

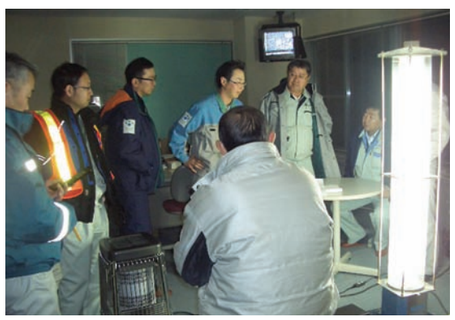
一番強く感じたことは、支部間あるいは企業間の連携の必要性です。横の連携があれば、行政からの依頼の有無に関係なく、より早い段階で啓開作業の支援が可能だったかもしれません。現在行っている衛星電話などを活用した情報伝達訓練は重要だと思います。

遠藤　震災直後から盛岡広域振興局との協議を行うとともに、対応が可能な重機や車両などの調査を行いました。４月に入ってからは宮古支部からの応援要請をいただき、宮古市田老と鍬ケ崎、山田町に16社を派遣しました。私の会社ではガソリンスタンドも経営していますので、現地に対しては燃料や食料などの寄付もしました。オペレーターも慣れない作業で大変な思いをして、辛い経験をした人も少なくなかったようです。

海野　発災後の弊社の対応を説明しますと、

３月 28 日　大船渡支部へ軽油等を支援する（千厩支部）

３月 19 日　大槌町浪板へ（花巻支部）



３月 11 日　支部事務所内、夜を徹しての情報収集（一関支部）

岩手河川国道事務所から依頼された盛岡バイパス上田地下道の照明確保、東北電力の非常用電源に用いる軽油の確保などを対応しました。また宮古市田老の道路啓開には、１班を派遣しました。

さらに、弊社の民部田前社長の奥様が陸前高田市出身で、ご家族を亡くされたこともあり、何とか協力したいと市に申し出をして、自衛隊と一緒に６カ月ほど災害廃棄物撤去をお手伝いいたしました。

菅原　花巻支部では、遠野支部と北上支部からのご協力をいただき、釜石支部と大槌町に対して燃料補給や支援物資の搬入を行いました。花巻市内では停電が発生しており、人工透析を行っている県立病院に発電機を提供するなどの対応をしましたが、連絡系統が一本化されず、行政から企業に直接依頼するケースもあり、課題を残しました。

森田　建設業の被災地支援について、もっと幅広く考えてよいのではと思っています。私は県南部にあるＢ級の会社が行った被災者支援で、焼きそばづくりのボランティアをお手伝いしました。被災された皆さんの大変な様子は他人事とは思えず、また食事の提供という形でもお役に立つことができると感じました。

建設業の災害対応を語る時、重機を使った道路啓開などハード面での対応に目がいきますが、被災地支援の形は一つではありません。ボランティアや物資面での後方支援など、ソフト面からの支援などもっと柔軟に考えてよいと思います。

八重樫　私自身は当日、社員と一緒に平泉町から一関市厳美町に向かっている途中でした。緊急地震速報とほぼ同時に大きな揺れがあって、古い民家が土埃を上げながら揺れていたことを記憶しています。急遽予定を変更して会社に戻ったのですが、国道４号は信号が止まり大渋滞が起きていたので、裏道を通って会社に戻りました。

会社としては道路啓開にある程度の目途が立った後、陸前高田市の郵便局の片付けを社員が手伝いました。後日聞いたところでは、天井裏からご遺体が見つかったりと大変なこともあったようです。社員から現地入りを拒否されなかったことがせめてもの救いです。

小原　私は当時、北上の支部長を務めており、14日の緊急支部長会議で宇部貞宏会長から後方支援の方針を伝えられました。北上支部は釜石支部を支援することになり、釜石市からポールやテープ、測量機器の支援を要請されたので、燃料や食料も合わせて現地に運んだ後、遠野支部の案内で、花巻支部と一緒に青木支部長を訪問しました。

釜石支部からは中妻地区の河川の土砂上げを要請されました。ダンプ10台、バックホー５～６台、キャリア２～３台が必要でしたが、管内には直営部隊を持たない会社もあり、機材集めに苦労しました。協力会社やリース会社から協力をいただき、何とか対応したのが実際のところです。

及川　奥州市は３月11日の本震よりも、４月７日の余震で被ったダメージの方が大きかったです。前沢地区で寸断した東北自動車道を72時間以内で復旧させるため、24時間体制を取り２日半で何とか復旧にこぎ着けました。同時に燃料を秋田港から運ぶために横手までタンクローリーを派遣しました。

市内では水道も止まったので、支部会員なども夜通し２～３日がかりで復旧しました。停電していたため、中継ポンプ場でポンプアップして配水池に水を揚げるにも発電機を集めなければならないなど、苦労しました。

坂本　震災当日は盛岡市の建設研修センターにいました。迎えの車のナビでテレビを見ると、宮古の防潮堤を津波が越える様子が映っていました。表現が適切かは分かりませんが、映画でも見ているかのようで現実感がありませんでした。

翌日に協会本部から、沿岸部への支援が必要になるかもしれないと連絡があり、軽油や燃料をあまり使わないようにするなど、準備はしておりましたが、実際の出動要請はありませんでした。

向井田　沿岸部では、発災直後の復旧から徐々に本格復興へと移行していく中で、新たな課題が出たかと思います。

大坂　宮古地区の資材不足は全国的なニュースにもなるほどで、特にも生コン不足が顕著でした。２週間に１回程度の配給をひたすら待ち、生コン打設という現実が数年続きました。当然のように資材価格は上昇の一途で、震災前の２倍。その他、石材は設計単価より高い金額を示され、「売らないとは言っておりません」という一言に愕然としたことも覚えています。復興工事がピークアウトし、需要が落ち着いた現在でも、資材の高止まりが続いているという声も耳にします。

八幡　釜石地区は、復興事業の進捗が早いほうだったと思います。これは災害廃棄物撤去の段階から各支部のご支援をいただけたことと、古い焼却炉が稼働できたことが大きかったと思っています。

本格復旧の段階で行政当局から言われたこ

大船渡市でボランティア実施　専門の技術を活かす（奥州支部）

４月12日　遠野農林センターと合同で大槌町吉里吉里で入浴施設を作る（遠野支部）

６月25日　釜石市内でボランティア活動を実施（北上支部）

とは「工事発注は建設業のためではない。被災者のためだ」ということ。つまりスピード感を持った対応が強く求められていました。そのため地元にできる仕事は地元、大型工事は内陸や中央大手ゼネコンにと、一定の棲み分けができていました。

紀室　大船渡地域も、早い段階で復興事業の進捗が図られ、陸前高田市の復興まちづくりを含めてハード事業は概ね完了しています。それは同時に、建設投資がどんどん落ち込んでいることも意味します。道路啓開から始まり、一日も早い復旧と復興に向けて大型ダンプやバックホーなど設備投資をした企業も多く、これが先々ボディブローのように企業体力を削いでいくのではと懸念しています。

向井田　内陸からも積極的に復興事業に参入した企業もありました。一方で、地域的な事情などから参加が難しかった企業もあったのではないでしょうか。

菅原　本格的な復旧・復興の段階において、当時の宇部会長が「オール岩手で復興」をテーマに掲げていただきました。沿岸部の地元企業だけでは対応が厳しそうな地域には、地元にご迷惑がかからないであろう範囲で参入しました。競争入札である以上やむを得ないのですが、将来を考えた場合、地元企業が施工することが望ましい工事もあったと思われ、個別のケースでは残念な事例も少なくありません。

坂本　復興工事への参入については、管内でも規模が大きい会社は別として、弊社のようなＢ級の会社は地元での仕事が最優先ですから、沿岸への応援は現実的には無理でした。二戸管内は

仕事が少なく、各社とも人員を相当絞っていた時期にも当たっていましたので。

海野　本格復興の段階では、弊社が受注する工事の約半分は沿岸での仕事になっていました。国土交通省の復興道路や陸前高田市のほ場整備などを皮切りに、様々な工事を経験しましたが、中でも山田町大浦のほ場整備と防潮堤は、足かけ９年にわたり整備を担当しました。

復興事業では、発注者から相談されることも多く、官民が同じ方向を向いて仕事をしていると実感しました。双方が良い関係を維持しながら復興事業を進められたことは私たちにとっての誇りですが、事業量が減少していく中で、今後この関係を持続できるかは不透明です。

台風10号、台風19号
復興の途上で起きた二つの災害

向井田　未だ記憶に新しいところですが、16年８月の台風10号、19年10月の台風19号と、この二つの災害は東日本大震災を除けば、県内において過去最大規模の災害だったと思います。また数年に一度のペースで、このクラスの災害が発生しても不思議ではないような気象状況にもなっています。復興の途上で起きた二つの災害を振り返ることで、将来への対策が見えてくるのかもしれません。

税田　台風10号の際、久慈市内では久慈川と長内川が氾濫し、市街地では最大浸水深が２㍍を超えるなど、東日本大震災を上回る被害が生じました。上流からの流木が橋桁に引っかかり、河川をせき止めたことが大きな要因と思われますが、管内の河川では河道掘削が進んでおらず、流下能力が低下したことが被害を大きくした一因と考えられます。私たちは以前から河道掘削の必要性を訴えており、改めて事業推進を要望しました。

　災害復旧をスムーズに進めるために、振興局と久慈市に被災個所をピックアップしてもらい、大ロット化した上で近隣の企業が対応する形を取りました。24時間体制での対応こそできませんでしたが、投光器を付けての夜間作業は実施しました。発災後には、当時の木下紘会長も現地入りしてくださいました。協会本部から支援をいただき、感謝しています。

熊谷　台風10号の被害は岩泉町内全域に広がっており、地元企業だけでの対応には限界がありました。本部、盛岡支部、久慈支部から多大なご支援をいただき、改めて感謝いたします。応急復旧に際しては24時間体制を要請されましたが、すでに限られた企業と人員を広域に配置している状況だったので、お断りせざるを得ませんでした。三陸沿岸道路のトンネル工事に入っていたゼネコンが、２班体制で24時間対応していただきました。

　行政機関も震災対応の経験が生きたのでしょう。国、県、自衛隊のいずれも非常に対応が早かったです。全体的にスピードアップはしましたが、どこかで縦割りの習慣が残っていましたし、受注者とのコミュニケーションについても、その対応には個人差が大きかったです。

大坂　震災復興が60～70％進んだ頃に台風10号、台風10号の復旧が70～80％に達した頃に台風19号と、宮古地区は３年から５年のペースで立て続けに大きな自然災害に見舞われました。台風10号の際には国土交通省が直轄で国道106号の復興支援道路を進めてお

り、発注者の一声で応急復旧に大手企業が対応してくれたことで、約２週間で車の往来が可能となりました。地元企業で対応することが理想でしたが、大手企業の力には心底助けられました。大手と地元、それぞれの得意分野を活かし合うことで、迅速な復旧が可能になった良い例だと思います。

その後の台風19号では重茂半島の道路・河川・簡易水道施設などのインフラがほぼ壊滅していたので、同地区の県や市の工事はいったん横に置いて、クリスマス前日までを目標に応急復旧に当たりました。地元住民を雇用している地元の会社が応急復旧しなければ、隣の家との往来すらできないような地域でもあり、地元企業は地域社会と一心同体だと再認識しました。

八幡　台風10号の翌日には振興局と支部が合同で現地を点検し、孤立集落を生じさせないようにとの消防からの要請に従い、片側交互通行をかけながら復旧作業を進めました。

時期的には震災復旧・復興の最盛期とも重なっていたので、県と市が協議をした上で、優先順位を付けることを要望しました。優先順位が明らかになればＡ、Ｂ、Ｃ級の分担がしやすくなりますし、被災個所が分散していれば大ロット化しての対応も可能です。市と県からご理解していただき、私たち地元での対応が可能となりました。

遠藤　県盛岡広域振興局土木部からの要請を受けて、国道106号、国道455号の落合～二升石地区、一般県道普代小屋瀬線などの復旧に当たりました。国道455号は９月３日から現場に入ったのですが、７日からは24時間の３交替制のシフトに入り12日の夕方には片側交互通行を確保しました。

弊社の社長は国道455号の現場にずっと張り付き、風呂に入れなかったので、小本川に入って水浴びをしたそうです。ライフラインの復旧という緊張感を持ちながらも、殺伐としない良い意味で和やかさがある現場というか、チームワークの取れた作業ができたのではないでしょうか。盛岡広域振興局に記録とＰＲ用のＤＶＤを作成していただき、ありがたく思っています。

向井田　震災復興の教訓が二つの台風災害に生かされた部分があれば、さらなる課題と今後の改善を図るべきテーマも見つかったことが分かりました。例えば24時間体制についても、いくらでも交代要員を用意できる中小建設企業はありません。さらには働き方改革に向けて、４週８休にも取り組んでいかなければならず、業界側からの問題提起や提言も必要になっていきます。

行政サイドも協会を窓口にしながら、信頼できる会社を一本釣りするケースも散見されました。これが情報の錯綜につながり業界側が翻弄されることになります。私たちが責任を持って対応する以上、権限を現場に委ねていただけるよう、行政機関との真の連携と情報共有を図っていきたいです。

完成した高田松原運動公園の野球場で地元少年チームが試合
（撮影日 2020年８月８日）

震災から得た教訓
将来に何を伝えていきたいか

向井田　皆さんはこの10年間、震災からの復興で多くのことを学んだと思います。震災から得た教訓、そして将来に何を伝えていきたいかお話しいただきたいと思います。

紀室　沿岸部における災害の心掛けとして、「津波てんでんこ」に勝るものはありません。理屈ではなく、各人が高台に逃げることに尽きます。そして大事なのは訓練ですね。情報伝達訓練などを通じて、行政機関との連携、支部間の連携、本部と支部の連携などをしっかりと構築し、オール岩手での対応へと発展させていくことが必要だと思います。

八幡　釜石では、釜石東中学校の生徒が鵜住居小学校の児童を誘導しながら避難したケースが「釜石の奇跡」と賞賛されましたが、これは奇跡ではなく、防災教育と避難訓練を繰り返した結果です。私たちは子供から、普段からの訓練の重要性を教えてもらいました。私たちも常に意識付けや訓練などで備えていなければ、いざというときに対応できません。常日頃からの備えが重要です。

大坂　「防潮堤により生かされている」「防潮堤で海が見えなくなった」…。多様な地元住民の声がありますが、地域防災という観点から申し上げれば、津波防災施設イコール安全ではありません。特にも防潮堤とは本来、高潮対策事業であり、津波に対する安全性を100％担保するものではありません。津波に対しては避難。「より早く、より高い場所へ逃げる」意識を地域の皆さんには常に持ってほしいです。

熊谷　岩泉支部は会員数も少ない、小規模な支部です。また台風10号など災害時には隣接支部からのご支援をいただきながら対応している状態ですが、他地域で大規模災害が発生した時には、これまでの経験を生かしてご支援をしたいと考えています。協会全体としても、南海トラフ地震や首都直下型地震など他県での大災害があった場合どのような支援ができるか、意思統一を図っていくことも大切

他県からの視察団に復興の状況を説明（釜石市、2012年７月）

2020年度災害訓練（遠野支部）（2021年２月25日）

鳥インフルエンザ防疫対応実地訓練（千厩支部）

だと思います。

税田　この10年間の災害対応を振り返ると、業界側の意見をもっと現場に反映できないかということです。私たちから行政機関に積極的に提言して、現場で主体性を持った対応ができるようになれば、迅速な復旧につながり、県民の安全・安心にもつながると思います。行政機関の役割分担も含めて、考えていく必要性があるかと思います。

遠藤　盛岡広域振興局は広大な面積を有し、ダムが４カ所あることから分かるように、大きな河川も多くあります。さらには岩手山には噴火リスクがあります。ひとたび災害が発生した場合、大規模な被害が生じることも懸念されますので、その際には各支部からのご支援もいただきながら、地域社会を守る役割を全うしていきたいと思います。

菅原　千年に一度と言われる東日本大震災をはじめ、何十年に一度、百年に一度と言われるような災害も増えています。温暖化の影響でしょうか、局地的な被害をもたらすゲリラ豪雨も増えており、市街地での内水氾濫も多くなっています。側溝など過去の災害に基づく規格で作られたインフラでは、対応しきれないケースも増えているように感じます。

　花巻支部では災害時の情報一元化に向けて、２年前から建設業協会、空調衛生工事業協会、電業協会、土木センター、市役所、ガス会社、電力会社、警察、消防の関係者が一堂に会して情報の一元化に取り組んでいます。具体的な地域のインフラに関する情報収集は、県の地域維持型の中で行っているパトロールで対応できますし、通行止めの際には警察、停電の際には電力会社など、情報の一元化が図られることで、素早い対応が可能になります。災害は場所や時を選びませんので、危機意識を持って取り組んでいきたいと考えています。

阿部　「天災は忘れた頃にやってくる」と言いますが、人は忘れるものですし、東日本大震災級の巨大災害もいつかは発生します。建設業では現在、ＩＣＴ施工をはじめとするＩＴ化が進展していますが、オペレーターの感性が衰えていくことが心配です。大規模災害が発生した際には実際に現場を見た上での気付きや感性が重要ですから、この震災で得た経験や教訓を後世に伝えていくことが必要だと思います。

　また地域によって企業形態はそれぞれ異なると思いますが、遠野は直営部隊と自前の機械を持っている会社が多い。今現在も、動けと言われれば動けます。そして支部会員同士の横のつながり、連携が図れている地域でもあります。この良い部分は、時代が変わろうがしっかりと残していきたいと考えています。

八重樫　東日本大震災の時に感じたのは、この災害が３年後、５年後に発生していたら、果たしてどうなっていたか。地元企業が対応できたかということです。今後も公共事業が減少していく中、各社が限られたリソースを有効活用するためには情報の一元化が不可欠であり、明確な指揮系統を構築できるような体制づくりが重要だと思います。

　そして皆さんがおっしゃるとおり、防災訓練の大切さを実感しています。北上地区は災害が少なく、土木センターとの情報伝達訓練程度しか行っておりませんが、より現場での実地を想定した訓練などが必要になるか、支部会員や関係機関との協議をしていきたいです。

及川　奥州支部では鳥インフルエンザの発生を想定し、養鶏場の掘削などの訓練を行っており、会員内でのイメージ共有はできています。他支部でも実地訓練を行ってください。

　近年はゲリラ豪雨も頻発していますし、全県下どこで、いつ、どのような災害が発生するか予想もできないのが現状です。地元企業は地域の地理や地形などに精通しています。災害時に地元企業が迅速に初動体制を取り、効果的に動くことができるよう、豪雨災害や大地震などを想定した訓練が必要だと考えています。また有事の際には自社の保有機械だけでは間に合わない可能性もありますのでリース業との連携や、必要に応じて災害協定なども必要かと考えています。

須田　一関支部は2008年の岩手宮城内陸地震の際、磐井川にできた土砂ダムを撤去するための工事用道路を独自に通しました。戦後のカスリン・アイオン台風では、土砂ダムが大きな被害をもたらしています。前年がカスリン台風の発災60年に当たっており、私たち自身も歴史から学び、啓発活動に取り組んでいたことが、過去の教訓を現在に生かすことにつながったと思います。普段からの備えがいかに重要であるか実感しました。

　また当地では鳥インフルエンザや豚コレラの発生が疑われる事例が毎年のようにあり、隣県では実際に発生もしています。その度に私たちは待機を命じられ、万が一陽性だった場合には72時間以内の埋設が必要ですが、埋設を想定している場所に低木があったりと、時間内の埋設は難しいだろうと思われる場所も多いです。これまで図上訓練の経験しかありませんが、実地訓練なども行政機関とは日ごろから連絡を取り合い対応することが大切だと思います。

小山　千厩地区はかつて、県内でも河川災害

「岩手県建設業協会防災の日」に当たっての情報伝達訓練

2016年８月に発生した台風10号による岩泉乙茂地区の被害状況（2016年９月４日）

正副会長団による台風10号の現地調査（2016年９月４日）

が多い地区でしたが、2002年の台風６号を契機に北上川や砂鉄川などでの堤防整備が進んだことに加えて、内陸部で豪雨が発生するケースが減ったことで、当地では大規模な災害は発生していません。一方で、地震や沿岸部での台風災害など、過去の経験則が当てはまらない災害が多発しています。支部の会員数は大きく変わりませんが、社員数はピーク時の半分近くにまでなっているのが実情であり、20年前と同様の災害対応ができるかという不安は常にあります。

また昨今は、行政機関からの要求も厳しくなり、交通量を考えると当座は通行止めの対応でもよさそうな路線であっても、早急な開通を求められますし、重要路線であれば24時間対応が求められることになります。そうなると、今後はより支部間同士、もしくは本部からの支援も重要になるでしょう。また災害時には地元企業が真っ先に災害対応することになりますが、少子高齢化が進み、若年労働者の確保は難しくなる一方。この現状をしっかりと頭に入れた上で、行政機関に対する提言をしていく必要があります。行政の指示を待つのではなく、業界サイドが一定の主導権を持てる方法を考えていかないと、遠からず限界が訪れます。

坂本　1999年に軽米町で雪谷川などの大水害がありましたし、台風10号では孤立集落が発生しました。このところ管内で大きな災害は発生していませんが、地元に機動力のある建設企業がなければ災害対応が困難になりますから、機器類や人材を維持する意味でも、ある程度コンスタントに地元企業が受注できる仕事があるべきです。予算確保と地元企業への発注を今後も要望していきたいです。

海野　東日本大震災では、資材不足や価格の高騰への対応、発注者との協議など、一つずつ壁に当たりながら、それを乗り越える経験を積み重ねた10年だったと思います。

そして、復興には建設業の力が必要であったことをしっかりとＰＲし、建設業なくして地域社会は守れないということを発注者である行政機関に伝え、ともに県土を守る役割を果たしていきたいと思います。

小原　県内企業もこの10年間、以前であれば受注できないような規模や技術水準の工事が経験できたことは大きいと思います。合わせて建設業がかつての３Ｋから新３Ｋとなり、週休２日をはじめとする働き方改革、ＩＣＴ施工など社会から広く認められる産業に脱皮している過程にあることも実感しています。

一方で、復興事業の最盛期にあった受発注者の一体感、Win－Win の関係性が薄れていくような雰囲気も感じています。いまは国土強靱化という新しい流れもあります。これまでの経験を生かしながら新しい動きを捉え、業界全体が疲弊しないように取り組んでいきたいです。

三浦　大規模災害の発生後に設置される災害対策本部に最初から建設業協会が組み込まれるよう、仕組みづくりが必要だと思っています。建設企業が直接の人命救助には携わることはありませんが、その手助けはできますし、道路啓開などの力量は圧倒的に私たちが優れています。会長や支部長などに情報を一元化し、協会がイニシアチブを取って対応できるような仕組みをつくることが、災害時における現場の即応性を向上させ、ひいては被災者、県民のためにもなると思います。

地域の将来像
建設業界のこれから

向井田　ありがとうございました。地域の将来像、建設業界のこれからについて、思うところをお話しいただけますか。

大坂　建設業界が抱える課題の一つが後継者の育成ですが、果たして将来の公共事業はどうなるか、新自由主義経済で建設業が生きていくことができるのか、その中で人材育成はどうあるべきかを考えています。各地域の将来に向けどのような事業が必要なのかを調査し、それを基にして業界側から新しい事業を企画立案し、地域の代表に提案する。地域の代表は関係市町村に地元からの声として強硬にお願いする。この繰り返しが必要だと思います。私たちはドローンなどの最新機器も活用しながら、図化して総工費も試算した上で、公共事業に携わるプロの視点としての声をどんどん提案・提言していくべきです。

もう一つ、海の工事をする立場からの現実を述べさせて下さい。起重機船だけでは海の仕事はできません。曳き船・押し船・警戒船・舫取潜水士船などがあって一船団になるわけですが、全て中古船でそろえても、大型ダンプの新車20台分でも全く足りません。船舶の中間検査・本検査は５年に１回。プロペラを外し、エンジンのピストンリングまで交換するのが必須条件で、継続的な仕事がなければ維持管理できません。仕事が多い時には「何とか受注してくれ」、仕事が無い時には「各自企業努力してくれ、副業を始めてそちらの儲けで会社運営をしてくれ」では、自助努力にも限界があります。陸も海も、一にも二にも仕事がなければどのような会社でも生きていけません。そして将来性のある、先行きが明るい、給料の良い、休日のある、安全・安心な就業

職業紹介マンガ「我らイワケン株式会社」（作・そのだつくし）

博物館（中央手前）や市民文化会館（中央奥）をはじめ、図書館、商店街、コミュニティ施設などが整備された陸前高田市中心部（撮影日 2021 年 7 月 25 日）

本郷地区（釜石市）の災害公営住宅（撮影日 2021 年 4 月 7 日）

環境なくして、人材育成に陰りが生じることになります。

「国土強靱化政策を推し進めずに、どうやってこの国の内なる生産力が産まれてくるのか」「より多くの納税無くして国は運営できるのか」。財政当局の皆さんに問いたいです。かつての「コンクリートから人へ」の思想や、B／C至上主義で物事を推し量ろうとする傾向が、政治の場にも息づいているようではこの国は成り立たなくなると懸念しています。

税田　復興・創生期間の終了に伴い事業量が減少していくわけですが、企業としては一定の人員を維持していかなければなりません。しかし少子高齢化で入職者数が減る、入社しても数年で退職する、職員の高年齢化が進行するという負のスパイラルに陥っていくことが懸念されます。建設業の担い手不足は、行政機関の実働部隊が弱体化することと同じです。国、県、協会がともに対策を考えていきたいです。

紀室　陸前高田市の人口が２万人を割り込むなど、大船渡地域では人口減少が顕著です。報道では外部からの移住者が明るい話題として取り上げられますが、あくまでも一握り。現実には人口減少は進む一方です。区画整理した土地での空き地も目立っています。

震災から10年が経過して復興事業が一段落しました。当然公共事業費は減少していく、しかし人口も減少している。そのような中で、建設業のあり方を模索していかなければなりません。私自身も悩みの中にあります。

八幡　釜石市も大船渡と同様、人口流出が止まりません。釜石市の人口３万人のうち、約１万3000人が65歳以上であるなど、高齢化も進んでいます。さらには大手スーパーの影響で、個人商店の閉店が相次いでいます。町としての存続可能性という官民共通の課題を抱えています。

熊谷　人がいない地域において建設業は必要とされません。地域社会が縮小していく中、私たちがどのように生き残っていくか、自治体と地域建設業がともに連携しながら知恵を出し合い、適切な距離感で連携を図っていければと思います。

森田　大切なことは、身の丈に合った経営。17年度に立ち上げた「建設業振興対策特別委員会」の中で、建設業界の構造改善について議論し、将来的な各等級のウエートや発注標準額の見直しなども視野に入ったと思っています。構造改善が進む中、各社が時代の流れに沿いながら、身の丈に合った経営をしていくことが大切になります。

身の丈に合った経営を進めるためには、幅広い業種から学ぶ姿勢が必要です。そして学んでいく過程で、地域課題の解決や地域振興のために自社のできること、成すべきことも見えてくるでしょう。さらには地域の守り手としての責任を果たしていくため、協業化という選択肢も生まれてくると思います。

佐藤　土木Ｃ級の立場からお話しさせていただきます。Ｃ級は非会員も多く、行政機関としては公平性の原則から、差別化も容易ではありません。また低額の工事では赤字の物件も増えてきています。これからも小規模な企業が地域で生き残っていくために、適切な事業量や方策など、協会として考えていければと思います。

三浦　震災から１年後ぐらいの業界紙に、震災直後の被災地支援で活躍したのは「オールドスクール」の企業だという記述がありました。これを私は、「地域に根ざして歴史を刻んできた企業」であると理解しており、これからも地元に根ざした企業が存在し続けなければならないと思っています。

そしてこの10年間、「オール岩手」のスローガンで震災復興と台風災害に対応してきたのですが、真の意味でのオール岩手ができたのかとも考えています。これからは「オール岩手」から「チーム岩手」に脱皮していくためにも、一度自ら問い直してみることが必要だと考えています。

向井田　長時間ありがとうございました。皆さんから積極的にご発言をいただきましたし、お互いに発言に伴う責任を持ちながら協会運営に当たっていきたいと思います。業界を取り巻く現実は厳しく、最高の答えは簡単に見つかりませんが、行政や住民からの理解も得ながら、より良い業界像を模索していきたいと思います。

岩手県建設業協会青年部座談会

震災から10年
若手経営者の思い、未来への挑戦

日時　2020年12月21日(月)
13時30分～15時30分
場所　ホテルメトロポリタン盛岡
ニューウイング

出席者（敬称略）

青木健一（岩手県建設業協会青年部連絡協議会　会長）
佐賀忠臣（同　副会長）
千葉智充（同　副会長）
山崎　修（同　副会長）
木下伸一（同　幹事長）

会長　青木　健一

副会長　佐賀　忠臣

副会長　千葉　智充

副会長　山崎　修

幹事長　木下　伸一

青木　2021年３月11日で東日本大震災の発生から10年となります。この節目に当たって、若手経営者が普段考えていることや、抱えている悩みなど、肩肘張らずに話し合いたいと思います。お互いの気づきや問題提起になれば幸いであり、何が正解というものではありません。まずは震災からの10年間を経て、皆さん自身の内面の変化についてお話しいただきたいと思います。

佐賀　「建設業の仕事を続けたい、会社を絶やしてはいけない」という思いが強くなりました。震災直後に陸前高田市から宮古市を回って現地の惨状を目にしたことや、現地でボランティアに参加したことなどが影響していると思います。今思えば、「後継者として家業を引き継いだ」という意識から、震災をきっかけに建設業の仕事に対する思い入れが強まったのかもしれません。

　また震災後に、釜石、遠野、花巻の３支部の交流が始まったことで、支部間のつながりができ、絆も深まったと思います。副会長としていまこの席にいることも、その時のご縁がつながっているのかなと思っています。

千葉　私は人の上に立つ者としての意識変革が大きかったです。当社では震災直後、ポンプ排水のお手伝いで石巻市に入っていましたが、大きな余震が頻発する中での命の危険を感じながらの仕事ということもあり、現地入りした社員の雰囲気もよくありませんでした。

　以前ならば「仕事だから」で済ませていた部分もありましたが、自らの生活を二の次にしながら現地入りしている社員もいました。社員が働いてくれるから会社がありますし、社員の一人一人に人生がある。いかに自分が社員を見ていなかったかと愕然としました。

山崎　私も、社員がいてこその会社であることを再認識しました。社員たちは発災直後から、文字通り三日三晩、食うや食わずの状態で現場に張り付き、復旧に当たりました。社員の大切さを改めて知るとともに、社員の家族を守り、社員とその家族が笑顔で暮らすことができるような環境をつくっていきたいと改めて感じました。

木下　普段から明確に意識していた訳ではないのですが、佐賀さんの話を聞いて、自分も同じだと感じました。だからこそ地元の建設企業が、もっと頑張っていかなければならないと思います。それも盛岡市なら盛岡市、宮古市ならば宮古市と、本当の意味での地元企業が、それぞれの地元で活躍できるようにしていきたいです。

青木　木下さんの問いかけは、非常に重要です。例えば震災直後の道路啓開においても、地元企業だからがれきだらけでも道路の場所も分かるし、建設業協会の支部があるからこそ、自治体や警察・自衛隊などに対し迅速に対応ができました。また社員の大切さも皆さんが言うとおりで、沿岸部では多くの社員が自身も被災するなど極限状態の中、避難所から現場に出てきた社員も多くいました。

　一方で災害時には建設業協会と県との災害協定に基づき地元企業が対応するが、本格的な復旧・復興工事は自由競争という現状では、社員が何をやりがいや使命感に頑張ればよいか分かりません。「地元を守る」をきれい事だ

けで済ませず、公共の仕事を担いながら地域を守る地域建設業の存在意義を考え、訴えていきたいですね。震災を経て一般の住民や行政など外部から建設業に向けられる目の変化などは感じましたか。

佐賀　災害時における建設業の対応や貢献が、震災を契機に広く知られるようになりましたが、10年の間にその意識が薄れているように見えます。また近年は自然災害が多発し、これまでの「ありがとう」が徐々に「当たり前」になっているように感じられます。受発注者の担当者間でのコミュニケーションも同様で、震災直後の一体感が徐々に薄れ、ドライになってきている感覚があります。

　確かに、私たち建設業界が災害時に出動するのは当然の責務です。感謝してもらえないと拗ねるのではなく、地域に根ざした建設業という存在の認知度向上も考えていく必要がありそうです。

山崎　久慈地域では、行政機関の担当者がフランクに相談をしてくれるようになっています。東日本大震災の後にも、16年の台風10号、19年の台風19号と、過去に経験したことがない規模の災害が立て続けに発生したことも影響していると考えます。災害時に頼りにされる産業であることは悪いことではないですし、受発注者の双方が、いかに現場をスムーズに運営するかということを重視しているのだと思われます。

ポスト復興期、建設業の姿は

青木　復興・創生期間が終了し、今後は公共事業の減少が避けられません。復興期間には抑制基調だった内陸部での事業にエンジンが掛かることを期待する声もありますが。

木下　全体のパイが縮小する中で過当競争がはじまり、「災害時は建設業が頼り」という慣用句にさえ対応できない状況になることが懸念されます。当然そのような将来像は望みませんし、除雪への対応も含めて地元企業の存続に向けて受注産業として何ができるか、毎日が悩みの中にあります。

千葉　公共投資が震災前の水準に戻っても、受注者が当時の状況に戻ることはないような気がします。企業間の格差が拡大する中で大規模な企業が受注や採用面で優位に立ち、地元で維持管理に努める企業が疲弊していくことを懸念しています。入札参加申請や総合評価落札方式についても、施工実績や新規採用などが評価されていますが、地域密着型の企業を育成するシステムになっているか、改めて考えていく必要があると思います。

　また震災前から地続きの問題なのですが、発注者も含めて建設の仕事に携わる人が減少し、除雪や維持は建設業者頼み、震災以降は発注ロットが大型化する傾向にあります。受発注者の担当者の双方が大きな工事をいくつも抱えて、現場の疲弊という形で歪みが生じていると感じています。

青木　現場の疲弊で言えば、特にも沿岸部の会社はみんな震災から10年間、120％で全力疾走してきました。当社で言えば、震災以降は道路や防潮堤など、震災前であればゼネコンが受注するような大規模な現場も経験しました。

　当社は私が入社した頃から震災前は下水道や維持補修など比較的小規模な現場を地道にこなす会社でした、以前から勤める社員はこれからをイメージできるのでしょうが、若い社員や震災以降入社した社員は「震災前」と言われてもイメージしきれない部分があると思います。大規模な現場経験は社員にとっても会社にとっても技術力という大きな財産となりましたが、今後いかに社員のモチベーションを保持していくかが課題です。これからは、待遇の面だけではなく、社員との共感力も重要になってくると思います。

佐賀　当社は民間建築の仕事が多く、特にも震災以降は社員の自主性が高まり、大雨や雪の時など自主的に顧客対応に当たるようになっています。私からは、お客さんの言葉を社員に伝えるようにしています。社員同士も部門ごとに気質の違いはありますが、それぞれのコミュニケーションを図り、同じ会社の社員だという意識付けをしていきたいと考えています。

千葉　冒頭に話したとおり、社員への目配り、気配りの大切さを再認識しているところであり、ここ数年ほど、社員との一対一の面談を行っています。また心掛けているのは、社員とのあいさつと雑談。その中で社員の様子が普段と違うなと思ったときには、直接の上司に私から相談し、対処するようにしています。

　また自分が反省するべき点があれば、意地を張らずに素直に謝ります。社長と社員の前に、一人の人間としての信頼関係が大事だと思っていますので、私の意見を出す前に、まずは社員の意見や思いを聞くようにしています。

青木　私自身の反省なのですが、期待していた社員に「大丈夫か？」と声がけすると、「大丈夫です」と返してくれていたのですが、そうしているうちに「やっぱりダメでした」と去ってしまいました。若い社員は自分が会社からどう思われているか分からず、感じるストレスもそれぞれです。現在は年齢が近い先輩社員をメンターにして、「大丈夫か？」と云う曖昧な問いかけではなく、当日の仕事内容や何を学んだかなど、基本入社から１年間はレポートを毎日出してもらい、そこに私がコメントしています。この取り組みを通じて、若い人や他業種で働いていた人が、今何を考えているのか知ることができています。また、社員に対して大切に思っていることも伝わるのではと考えています。

木下　震災後に協力会社さんの確保が大変だったこともあり、当社は直営の人材確保に努めている最中で、20代が８人増えるなど、若返りが図られています。私は現場の担当から離れて５年ほど経ってしまったので、ＩＣＴなどの分野に精通した社員からレクチャーを受けています。説明する社員にとっても勉強になりますし、人に教えることで意気に感じてくれているようです。

　20代の若手社員の意見を反映して、頑張って1000万円のトータルステーションを購入しました。これが社員のモチベーションにつ

ながっているようで、有効な投資だったと思っています。

山崎　当社では高卒８人、中途１人と新しい社員を採用しています。建設業に限らず、全体に若い人が増え、以前よりも活気付いているように感じられます。若い社員に対しては、焼き鳥屋さんで一対一での食事をしたり、親しみを込めてファーストネームで呼んだり、あいさつも大きい声で自分からを心掛けています。基本的に体育会的な接し方ですね。

今後は事業量の激減が予想されますが、当時も事業規模を縮小しながらも経営を維持していました。この多忙だった10年間から、意識の部分も含めてどのようにシフトチェンジをしていくかが課題になるかと思います。

持続可能な建設産業界へ

青木　今後の建設業のあり方、会社と社員の関わり方など、変化していく部分もあるとは思いますが、建設業という産業を存続させていきたいという思いは同じですね。最後に皆さんから、それぞれの会社や建設業界のこれからに対する思いをお伺いしたいと思います。

佐賀　自分の会社を維持していくことは当然として、岩手の建設産業全体が生き残っていけるような仕組みづくりをして、若い人たちが岩手の建設業で働いてよかったと思ってもらえるようにしたいです。現場で働く人がいてこその建設業ですから、工業高校卒業者だけではなく、普通高校、女性や他産業からの入職なども含めて建設業で働きたいと思ってくれる人を一人でも増やせるよう、まずは自分の会社が魅力のある会社になり、地域を守るという責任を果たせるように成長したいですね。

山崎　企業を存続させ、従業員とその家族を守るため何をすべきか。自問自答と自己改革を重ね、時代に対応して変化をしながら、皆さんと一緒に建設業界の発展に貢献したいと考えています

木下　地域社会・行政・建設産業界の三位一体で地域のあり方を考え、努力していかなければならないと思います。もちろん自分の会社は大事ですが、自分さえ良ければという自己中心的な考えではなく、自他共栄で業界全体の振興を図りながら行政を支援し、地域全体を盛り上げていけるよう、そしてそのような建設業界の姿を地域社会から理解していただけるよう取り組んでいきたいと考えています。

設立30周年記念式典（2019年10月２日）

千葉　建設業に限らず、社会から必要とされる会社であり続けるため常に変化し、間口を広く取り、期待に応えることが大切だと思っています。そして当社で働いている人はもちろん、建設業で働いている人が、生活を楽しみ、家庭環境の向上にもつながるよう、経営者として何をすべきか、模索し続けていくしかないと思っています。

青木　皆さんのお話を聞きながら、地域社会とも連携しながらの新たな需要の創出、鳥インフルエンザや口蹄疫なども含めて防災に果たす建設業の役割、行政と業界とのミスマッチ解消など、私たちからの情報発信がますます大切になっていくと思います。問題意識や危機感の共有などを図るためにも、青年部と行政機関との意見交換なども呼び掛けていきたいですね。

県では、他県で生活しながら本県でスキルを生かした複業を希望する人とのマッチング事業として「遠恋複業課」という事業を行っています。このような外部の人の力も借りながら、様々な可能性を探っていきたいです。コロナ禍や世界情勢など社会全体が不透明で１年先も見通せない状況ですが、言い訳や横睨みをするのではなく、皆さんと一緒に様々なチャレンジをしていきたいです。きょうはありがとうございました。

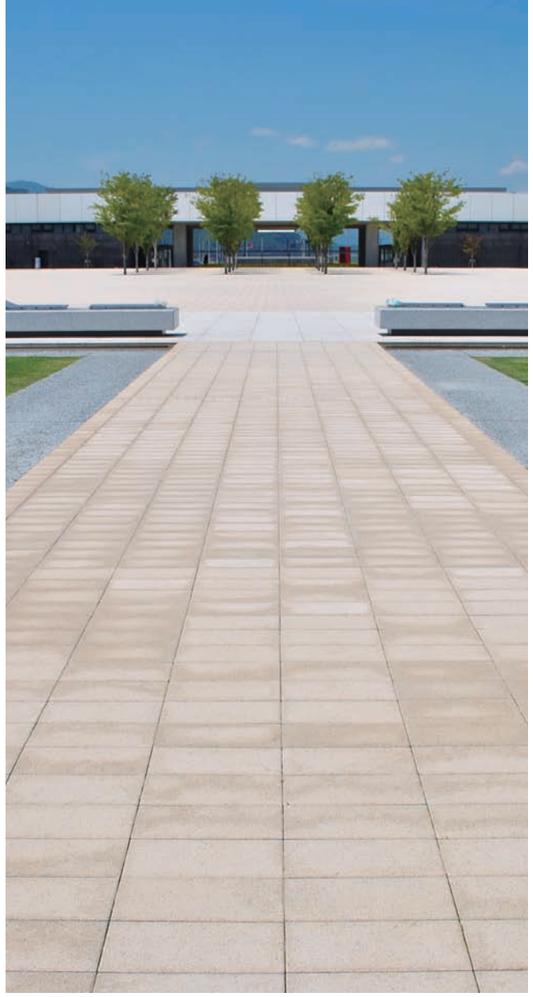
遠野かっぱ工事隊保育園訪問（2021年１月28日）

千厩支部・国道343号清掃（2021年7月15日）

岩泉支部・ふれあい事業（2020年9月9日）

釜石支部・ふれあい事業（2020年11月16日）

北上支部・黒工測量（2021年6月24日）



第3章
震災を伝える

―教訓と想いを後世へ―

震災を伝える　復興祈念公園

東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂の場として、国が地方と連携し、岩手、宮城、福島の各県に１カ所整備する復興祈念公園。岩手県では、津波により壊滅的な被害を受けた陸前高田市中心部の海沿い、高田松原一帯に公園が設置され、震災の教訓や復興の姿を国内外に発信している。

被災した高田松原に復興祈念公園を

かつて、気仙川の河口から約２㌔にわたり砂浜が広がっていた高田松原は、夏には多くの海水浴客でにぎわう白砂青松の景勝地だったが、震災の津波で砂浜の９割を消失。約７万本と言われた松林も、「奇跡の一本松」を残して全て流失した。

震災後、岩手県と陸前高田市は、12年度に高田松原地区震災復興祈念公園構想会議を設置し、公園のあり方をまとめ、国へ提言。これを受け国は13年度から県、市と連携して有識者委員会を設け、整備内容の検討を進めていった。

17年３月には、高田松原津波復興祈念公園の起工式を実施。以降、国と県、市による共同での整備が図られていった。

祈りの軸と復興の軸が交わる追悼・鎮魂の場

公園の基本理念は、「奇跡の一本松が残ったこの場所で　犠牲者への追悼と鎮魂の思いとともに　震災の教訓とそこからの復興の姿を　高田松原の再生と重ね合わせ未来に伝えていく」。総面積は約130㌶で、中核エリアとなる約10㌶には国営追悼・祈念施設として、津波の方向を示す「祈りの軸」上に、「献花の場」や、両側になだらかな築山を配した切通し空間、芝生の追悼広場、防潮堤上には「海を望む場」を設置している。「祈りの軸」に直交する形で設定した「復興の軸」上には、被災した旧道の駅「高田松原」タピック45があるほか、２軸の交点には、東日本大震災津波伝承館（いわてＴＳＵＮＡＭＩメモリアル）、道の駅「高田松原」などが入る建物を整備。建物全体の規模は、鉄筋コンクリート造一部鉄骨造２階建ての、延べ床面積4340平方㍍で、三陸沿岸地域におけるゲートウェイ（玄関口）の役割を担っている。

このほか園内では古川沼や、防潮堤第１線堤と同第２線堤の間には松林を再生。松林エリアには、21年５月までに当初計画していた４万本のマツの苗木が植樹された。公園北側には、市が野球場やサッカー場などを備える高田松原運動公園を整備。市のスポーツ拠点として多くの市民に利用されている。

国営追悼・祈念施設は19年９月に供用開始

園内では国営追悼・祈念施設の「献花の場」や東日本大震災津波伝承館、道の駅など主要部分が、19年９月に一般供用を開始。供用当日は、多くの市民が訪れ、防潮堤上に設置された「海を望む場」で震災前の景色を思い起こしながら、鎮魂の思いを新たにしていた。

その後、供用エリアは順次拡大。21年９月末には大部分が完成し、工事は周辺部分を残すのみとなっている。公園は21年内の全体完成が予定されている。

津波学習拠点となる県の震災津波伝承館

公園の中核エリアに整備された東日本大震災津波伝承館では、パネルや実際に被災した物、津波の実写映像などを通して、津波災害の歴史、震災の事実を発信。発災時を振り返りながら、命を守るための教訓を伝えている。

岩手県の県営伝承施設は同館のみで、展示面積は1155平方㍍。展示テーマは、「命を守り、海と大地と共に生きる～二度と東日本大震災津波の悲しみをくり返さないために～」。館内には、三陸沿岸地域や３・11伝承ロードなどの情報を提供するエントランスや、テーマの趣旨を総括して映像で説明するガイダンスシアターが設置されている。

四つのゾーンの展示エリア

展示エリアは、「歴史をひもとく」、「事実を知る」、「教訓を学ぶ」、「復興を共に進める」－の四つのゾーンに区分。ゾーン１「歴史をひもとく」では、地球の活動と地震・津波の災害を歴史的、科学的視点から解説。ゾーン２「事実を知る」では、津波に押し流された消防車両や、流失した気仙大橋の展示をはじめ、沿岸を襲った津波の実写映像、被災者の証言、記録で災害の事実を伝えている。

ゾーン３「教訓を学ぶ」では、命を守った行動や、避難上の課題などをパネルで説明。地元建設業者が使命感から、自らも被災する中、必死に道路啓開に当たったエピソードも紹介されている。このほか、現場を指揮した東北地方整備局の災害対策室も再現して展示。発災時の人々の行動をひもときながら、「てんでんこ」の教えを通じ、知恵と技術で備え、自ら行動することで命を守ることの大切さを発信している。ゾーン４「復興を共に進める」では、国内外からの支援へ感謝を伝えるとともに、復興に取り組む被災地の姿を紹介する。

震災遺構と連携し防災文化を培う

伝承館からは震災遺構となる旧道の駅「高田松原」タピック45の外観も見学できる。園内には、震災遺構として旧道の駅のほか、奇跡の一本松、陸前高田ユースホステル、気仙中学校、下宿定住促進住宅が残されており、津波のすさまじさを目に見える形で今に伝えている。旧道の駅と気仙中学校は、内部を公開するため保存整備も行われた。

館内を見学後、周辺の震災遺構を見て回る来訪者も多く、公園全体が防災文化を培う場となっている。

震災遺構・奇跡の一本松と陸前高田ユースホステル

震災遺構・旧道の駅「高田松原」タピック45

震災遺構・下宿定住促進住宅

次世代の防災力向上へ

伝承館には19年９月の開館以来、21年６月末現在で、累計約37万人が来館。コロナ禍による影響もある中、県内外の小中学校・高校の修学旅行生などが訪れ、震災の事実や避難の重要性を学んでいる。

彼らが実際に見て感じ、学び取った教訓は、次世代の防災力の向上に役立てられていく。

震災遺構・気仙中学校

震災遺構 ── 後世に伝える

震災伝承施設とは　東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設です。事実や記憶、経験や教訓を伝えることで新たにできる教訓・伝承の道『3.11伝承ロード』を構成する施設です。震災伝承施設の登録制度は平成30年に開始され、申請に基づき震災伝承ネットワーク協議会が登録を行っています。「震災伝承施設」は第1、第2、第3に分類されています。

第１分類とは　下記の項目のいずれか一つ以上に該当する施設。
・災害の教訓が理解できるもの
・災害時の防災に貢献できるもの
・災害の恐怖や自然の畏怖（いふ）を理解できるもの
・災害における歴史的・学術的価値があるもの
・その他、災害の実情や教訓の伝承と認められるもの

第２分類とは　第１分類の条件を満たし、かつ、公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料又は無料の駐車場がある等、来訪者が訪問しやすい施設。

第３分類とは　第２分類の条件を満たし、かつ、案内員の配置や語り部活動等、来訪者の理解しやすさに配慮している施設。

出展：震災伝承ネットワーク協議会事務局（国土交通省東北地方整備局企画部）

〔釜石市〕　釜石祈りのパーク（左下）などが設置された、うのすまいトモス（2021年８月19日撮影）

〔釜石市〕　釜石祈りのパーク
（2021年７月24日撮影）

〔釜石市〕　いのちをつなぐ未来館
（2021年７月24日撮影）

〔宮古市〕　東北地方整備局や震災津波の被災４県、仙台市からなる震災伝承ネットワーク協議会が登録を決定した震災伝承施設のうち、初めての登録証伝達式と、案内標識第１号のお披露目式が実施された「震災伝承案内標識」
（2019年５月20日撮影）

〔田野畑村〕　震災遺構「明戸海岸防潮堤」
（第3-012号）
（2017年２月28日撮影）

〔野田村〕　過去の三陸地震の津波碑
（2020年10月13日撮影）

〔野田村〕　震災遺構「米田歩道橋」。（第2-007号）
国道45号の歩道橋の一部だったが、東日本大震災の津波で流失した
（2021年６月14日撮影）

〔野田村〕　東日本大震災大津波記念碑
（奥側は十府ケ浦海岸）（第2-020号）
（2020年10月13日撮影）

〔宮古市〕　震災遺構「たろう観光ホテル」
（第3-001号）
（2017年３月７日撮影）

第３分類とは　第２分類の条件を満たし、かつ、案内員の配置や語り部活動等、来訪者の理解しやすさに配慮している施設。

第３分類

① 第3-001号 **津波遺構たろう観光ホテル**
〒027-0323 宮古市田老字野原80番地1　TEL.0193-77-3305

② 第3-002号 **たろう潮里ステーション**
〒027-0307 宮古市田老二丁目5番1号　TEL.0193-65-7506

③ 第3-003号 **宮古市市民交流センター 防災プラザ**
〒027-8501 宮古市宮町一丁目1番30号　TEL.0193-63-4166

④ 第3-004号 **田老防潮堤**
〒027-0306 宮古市田老字川向 地内　TEL.0193-65-0031

⑤ 第3-005号 **震災メモリアルパーク中の浜**
〒027-0097 宮古市崎山第3地割123番地　TEL.0193-62-3912

⑥ 第3-006号 **大船渡市立博物館**
〒022-0001 大船渡市末崎町字大浜221-86　TEL.0192-29-2161

⑦ 第3-007号 **地下水族科学館　もぐらんぴあ**
〒028-7801 久慈市侍浜町麦生町第1地割43番地7　TEL.0194-75-3551

⑧ 第3-008号 **3.11東日本大震災遠野市後方支援資料館**
〒028-0501 遠野市青笹町糠前10地割46番地（遠野市総合防災センター敷地内）　TEL.0198-62-2111（内線123）

⑨ 第3-009号 **釜石祈りのパーク**
〒026-0301 釜石市鵜住居町四丁目地内　TEL.0193-27-5666

⑩ 第3-010号 **いのちをつなぐ未来館**
〒026-0301 釜石市鵜住居町四丁目901番2　TEL.0193-27-5666

⑪ 第3-011号 **大槌町文化交流センター おしゃっち**
〒028-1117 上閉伊郡大槌町末広町1番15号　TEL.0193-42-8718

⑫ 第3-012号 **震災遺構明戸海岸防潮堤**
〒028-8402 下閉伊郡田野畑村明戸海岸　TEL.0194-34-2111（代表）

⑬ 第3-013号 **島越ふれあい公園**
〒028-8404 下閉伊郡田野畑村松前沢1-4、1-52　TEL.0194-34-2111（代表）

⑭ 第3-014号 **羅賀ふれあい公園**
〒028-8403 下閉伊郡田野畑村羅賀27-2　TEL.0194-34-2111（代表）

⑮ 第3-015号 **東日本大震災津波伝承館（愛称：いわて TSUNAMI メモリアル）**
〒029-2204 陸前高田市気仙町字土手影180番地　TEL.0192-47-4455

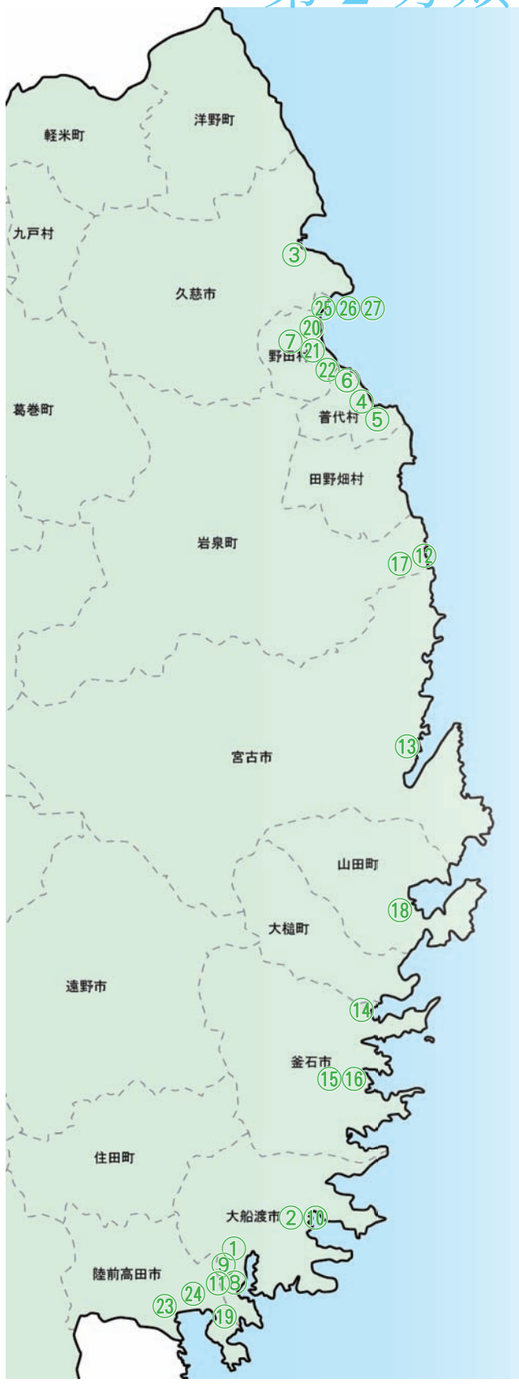
⑯ 第3-016号 **高田松原国営追悼・祈念施設**
〒029-2204 陸前高田市気仙町字土手影地内　TEL.0192-22-8911

⑰ 第3-017号 **野田村復興展示室**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田第17地割107　TEL.0194-78-2963

⑱ 第3-018号 **山田町まちなか交流センター**
〒028-1342 下閉伊郡山田町川向町6-24　TEL.0193-82-3111

第２分類とは　第１分類の条件を満たし、かつ、公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料又は無料の駐車場がある等、来訪者が訪問しやすい施設。

第２分類



① 第2-001号 **大船渡市民体育館前屋外時計**
〒022-0003 大船渡市盛町字中道下1-1（大船渡市民体育館付近）　TEL.0192-27-3111

② 第2-002号 **潮目**
〒022-0101 大船渡市三陸町越喜来字肥ノ田30-10　TEL.090-8780-5509

③ 第2-003号 **ケルン・鎮魂の鐘と光**
〒028-0041 久慈市長内町第42地割（JC公園内）　TEL.090-1931-3950

④ 第2-004号 **故和村幸得元普代村長顕彰碑**
〒028-8341 下閉伊郡普代村第7地割　TEL.0194-35-2114

⑤ 第2-005号 **太田名部防潮堤**
〒028-8345 下閉伊郡普代村第8地割　TEL.0194-53-4990

⑥ 第2-006号 **普代水門**
〒028-8331 下閉伊郡普代村第14地割　TEL.0194-53-4990

⑦ 第2-007号 **米田歩道橋の一部**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田9-51-9　TEL.0194-78-2111

⑧ 第2-008号 **茶茶丸パーク時計塔**
〒022-0002 大船渡市大船渡町字茶屋前地内（夢海公園内）　TEL.0192-27-3111

⑨ 第2-009号 **夢海公園**
〒022-0003 大船渡市大船渡町字茶屋前103-3外37筆　TEL.0192-27-3111

⑩ 第2-010号 **ど根性ポプラ（大船渡市浦浜地区緑地広場）**
〒022-0101 大船渡市三陸町越喜来字杉下24番地　TEL.0192-27-3111

⑪ 第2-011号 **津波警報塔**
〒022-0002 大船渡市大船渡町字笹崎地内（加茂神社境内）　TEL.0192-27-3111

⑫ 第2-012号 **震災伝承看板「子どもたちの命を救った避難階段（国道45号）」**
〒027-0421 下閉伊郡岩泉町小本字小本6番地25　TEL.0194-22-2111

⑬ 第2-013号 **震災伝承看板「海上からの緊急支援物資輸送ルートを啓く（宮古港）」**
〒027-0004 宮古市臨港通1-20　TEL.022-225-2171（代表）

⑭ 第2-014号 **震災伝承看板「子どもたちの命を救った道（三陸沿岸道路　釜石山田道路）」**
〒026-030 釜石市鵜住居第18地割5-1　TEL.022-225-2171（代表）

⑮ 第2-015号 **震災伝承看板「救援ルートを切り啓いた「くしの歯作戦」（釜石市）」**
〒026-0031 釜石市鈴子町22　TEL.022-225-2171（代表）

⑯ 第2-016号 **震災伝承看板「海上からの緊急支援物資輸送ルートを確保した航路啓開（釜石港）」「津波の教訓を活かした粘り強い防波堤（釜石港湾口防波堤）」**
〒026-0021 釜石市魚河岸3-3（釜石魚河岸にぎわい館「魚河岸テラス」）　TEL.022-225-2171（代表）

⑰ 第2-017号 **東日本大震災津波記念碑**
〒027-0401 下閉伊郡岩泉町小本字南中野239-1　TEL：0194-22-2111

⑱ 第2-018号 **御蔵山復興祈念公園**
〒028-1341 下閉伊郡山田町八幡町269番、270番　TEL.0193-82-3111

⑲ 第2-019号 **３．１１希望の灯り**
〒029-2207 陸前高田市小友町字茗荷1-237　TEL.0192-56-2911

⑳ 第2-020号 **東日本大震災大津波記念碑**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田第10地割40　TEL.0194-78-2963

㉑ 第2-021号 **米田水門**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田第9地割38-11　TEL.0194-53-4990

㉒ 第2-022号 **旧下安家地区応急仮設住宅**
〒028-8202 九戸郡野田村大字玉川2地割62-28　TEL.0194-78-2963

㉓ 第2-023号 **ハナミズキのみち**
〒029-2205 陸前高田市高田町字曲松地内　TEL.080-1852-2587

㉔ 第2-024号 **二度と散らないねがい桜**
〒029-2206 陸前高田市米崎町字地竹沢181　普門寺　TEL.0192-55-3300

㉕ 第2-025号 **愛宕参道大鳥居**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田第26地割16　TEL.0194-78-2012

㉖ 第2-026号 **奇跡の東屋**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田第18地割34-1　TEL.0194-78-2926

㉗ 第2-027号 **役場前の被災時計**
〒028-8201 九戸郡野田村大字野田第20地割14　TEL.0194-78-2111

第１分類

第１分類とは　下記の項目のいずれか一つ以上に該当する施設。

・災害の教訓が理解できるもの
・災害時の防災に貢献できるもの
・災害の恐怖や自然の畏怖（いふ）を理解できるもの
・災害における歴史的・学術的価値があるもの
・その他、災害の実情や教訓の伝承と認められるもの

① 第1-001号 **津波到達点**
〒027-0322 宮古市田老字青砂里174番1　TEL.0193-68-9091

② 第1-002号 **津波記念碑**
〒027-0322 宮古市田老字館が森155-2　TEL.0193-68-9091

③ 第1-003号 **震災伝承看板「救援ルートを確保した道路啓開「くしの歯作戦」」**
〒027-0081 宮古市新川町2-1　TEL.022-225-2171（代表）

④ 第1-004号 **津波石碑（大海嘯記念）**
宮古市日立浜町（浄土ヶ浜屏風岩の下）

⑤ 第1-005号 **津波石碑（津波記念碑）**
大船渡市赤崎町字合足（沿道）

⑥ 第1-006号 **津波石碑（津波記念碑）**
大船渡市赤崎町字蛸ノ浦（沿道）

⑦ 第1-007号 **津波石碑（津波記念碑）**
大船渡市赤崎町字跡浜（大船渡綾里三陸線脇）

⑧ 第1-008号 **津波石碑（津波犠牲者の霊に捧げる）**
大船渡市大船渡町字富沢（西光寺）

⑨ 第1-009号 **津波石碑（昭和35年5月24日 チリ地震津波到達地点）**
大船渡市大船渡町字地ノ森（沿道）

⑩ 第1-010号 **津波石碑（昭和35年5月24日 チリ地震津波襲来地点）**
大船渡市大船渡町字野々田（沿道）

⑪ 第1-011号 **津波石碑（昭和35年5月24日 チリ地震津波到達地点）**
大船渡市大船渡町字笹崎（国道45号脇）

⑫ 第1-012号 **津波石碑（海嘯溺死之霊）**
大船渡市末崎町字細浦（長源寺）

⑬ 第1-013号 **津波石碑（津浪横死者供養碑）**
大船渡市末崎町字細浦（長源寺）

⑭ 第1-014号 **津波石碑（津浪横死者慰霊塔）**
大船渡市末崎町字中森（麟祥寺）

⑮ 第1-015号 **津波石碑（津波記念碑）**
大船渡市三陸町越喜来字仲崎浜（(県) 崎浜港線脇）

⑯ 第1-016号 **津波石碑（津浪記念碑）**
大船渡市三陸町越喜来字鬼沢（大船渡綾里三陸線脇）

⑰ 第1-017号 **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）**
久慈市侍浜町麦生（麦生農村センター）

⑱ 第1-018号 **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）**
久慈市侍浜町白前（侍浜夏井線脇）

⑲ 第1-019号 **津波石碑（海嘯記念碑）**
久慈市夏井町（国道395（旧45）号線）

⑳ 第1-020号 **津波石碑（津波記念碑）**
久慈市湊町（金刀比羅神社）

㉑ 第1-021号 **津波石碑（防潮林記念碑）**
久慈市湊町（金刀比羅神社）

㉒ 第1-022号 **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）**
久慈市長内町（国道45号脇諏訪神社入口）

㉓ 第1-023号 **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）**
久慈市宇部町（小袖）（個人宅裏）

㉔ 第1-024号 **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）**
久慈市宇部町（久喜）（漁協久喜支所前）

㉕ 第1-025号 **奇跡の一本松・陸前高田ユースホステル**
〒029-2204 陸前高田市気仙町字砂盛176-6　TEL.0192-54-2111（内線302）

㉖ 第1-026号 **道の駅高田松原タピック４５**
〒029-2205 陸前高田市高田町字古川28-5　TEL.0192-54-2111（内線302）

㉗ 第1-027号 **下宿定住促進住宅**
〒029-2205 陸前高田市高田町字下宿34-5　TEL.0192-54-2111（内線302）

㉘ 第1-028号 **気仙中学校**
〒029-2204 陸前高田市気仙町字小渕77-1　TEL.0192-54-2111（内線302）

㉙ 第1-029号 **津波石碑（津波到達地点記念碑　長洞の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字長洞（個人宅前）

㉚ 第1-030号 **津波石碑（津波到達地点記念碑　後花貝の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字後花貝（大船渡広田陸前高田線脇）

㉛ 第1-031号 **津波石碑（津波到達地点記念碑　広田小学校の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字大久保（大船渡広田陸前高田線脇）

㉜ 第1-032号 **津波石碑（津波到達地点記念碑　根岬の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字根岬（大船渡広田陸前高田線脇）

㉝ 第1-033号 **津波石碑（津波到達地点記念碑　泊の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字泊（大船渡広田陸前高田線脇）

㉞ 第1-034号 **津波石碑（湊の津波記念碑）**
陸前高田市気仙町字湊（沿道）

㉟ 第1-035号 **津波石碑（津波記念碑）**
釜石市片岸町（室浜）（吉里吉里釜石線脇）

㊱ 第1-036号 **津波石碑（津波記念碑）**
釜石市片岸町（室浜）（国道45号脇）

㊲ 第1-037号 **津波石碑（津波記念碑）**
釜石市箱崎町（箱崎）（沿道）

㊳ 第1-038号 **津波石碑（津波記念碑）**
釜石市両石町（国道45号脇）

㊴ 第1-039号 **津波石碑（大海嘯記念）**
釜石市大只越町（大只越公園）

㊶ 第1-041号 **津波石碑（大海嘯記念）**
山田町船越（船越駅北）

㊷ 第1-042号 **津波石碑（三陸大海嘯溺死者慰霊塔）**
山田町船越（海蔵寺）

㊸ 第1-043号 **津波石碑（大海嘯記念）**
山田町船越田の浜（県道入口）

㊹ 第1-044号 **津波石碑（三陸大海嘯記念）**
岩泉町小本（小本小学校）

㊺ 第1-045号 **津波石碑（三陸大海嘯記念）**
岩泉町小本（茂師）（国道45号脇）

㊻ 第1-046号 **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）**
田野畑村島越（広福寺）

㊼ 第1-047号 **津波石碑（大海嘯記念）**
普代村（個人宅裏山）

㊽ 第1-048号 **津波石碑（三陸大海嘯 溺死者・諸精霊供養搭）**
普代村（妙相寺）

㊾ 第1-049号 **津波石碑（不慮の津浪に不断の注意）**
洋野町種市（川尻）（川尻水門付近）

第１分類

50 第1-050号 **津波石碑（鶴樹神社の津波溺死霊供養塔）**
陸前高田市広田町字根岬102番地５　TEL.0192-54-2111（内線255）

51 第1-051号 **津波石碑（明下の招魂供養塔）**
陸前高田市広田町字明下58番地６　TEL.0192-54-2111（内線255）

52 第1-052号 **津波石碑（大陽の津波溺死紀念碑）**
陸前高田市広田町字大陽107番地２　TEL.0192-54-2111（内線255）

53 第1-053号 **津波石碑（慈恩寺の海嘯招霊碑）**
陸前高田市広田町字泊53番地　TEL.0192-54-2111（内線255）

54 第1-054号 **津波石碑（前花貝の海嘯溺死漂着者碑）**
陸前高田市広田町字前花貝５番地１　TEL.0192-54-2111（内線255）

55 第1-055号 **津波石碑（華蔵寺の弔海嘯赤痢亡霊碑）**
陸前高田市小友町字門前23番地　TEL.0192-54-2111（内線255）

56 第1-056号 **津波石碑（華蔵寺の海嘯溺死供養塔）**
陸前高田市小友町字門前23番地　TEL.0192-54-2111（内線255）

57 第1-057号 **津波石碑（華蔵寺の弔海嘯溺死霊碑）**
陸前高田市小友町字門前23番地　TEL.0192-54-2111（内線255）

58 第1-058号 **津波到達地点記念碑（中沢の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字中沢50番地　TEL.0192-54-2111（内線255）

59 第1-059号 **津波到達地点記念碑（六ヶ浦の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字六ヶ浦158番地　TEL.0192-54-2111（内線255）

60 第1-060号 **津波到達地点記念碑（大陽の津波記念碑）**
陸前高田市広田町字大陽216番地２　TEL.0192-54-2111（内線255）

61 第1-061号 **桜木町・花輪田地区慰霊碑**
上閉伊郡大槌町小鎚第26地割　TEL.0193-42-8720
（花輪田地区集会所付近）

62 第1-062号 **小枕・伸松地区慰霊碑、芳名塔**
上閉伊郡大槌町小鎚第28地割　TEL.0193-42-8720
（小枕地区集会所付近）

63 第1-063号 **沢山・大ヶ口地区慰霊碑（沢山）、津波到達伝承表示**
上閉伊郡大槌町大槌第23地割　TEL.0193-42-8720
（釜石警察署大槌交番付近）

64 第1-064号 **沢山・大ヶ口地区慰霊碑（源水）**
上閉伊郡大槌町大槌第14地割　TEL.0193-42-8720
（県営屋敷前アパート付近）

65 第1-065号 **赤浜地区慰霊のモニュメント**
上閉伊郡大槌町赤浜１丁目　TEL.0193-42-8720
（東京大学大気海洋研究所付近）

66 第1-066号 **吉里吉里地区慰霊碑、津波到達伝承碑**
上閉伊郡大槌町吉里吉里３丁目　TEL.0193-42-8720
（天照御祖神社付近）

67 第1-067号 **浪板地区慰霊碑、津波到達伝承碑（５基）**
上閉伊郡大槌町吉里々々第８地割、第10地割（浪板海岸駅、鯨山神社）、第11地割、第14地割　TEL.0193-42-8720

68 第1-068号 **小鎚地区慰霊碑**
上閉伊郡大槌町小鎚第13地割　TEL.0193-42-8720
（旧大槌町立小鎚小学校付近）

69 第1-069号 **金沢地区慰霊碑**
上閉伊郡大槌町金澤第28地割　TEL.0193-42-8720
（大勝院付近）

第4章
相次ぐ自然災害と向き合う

―「地域の守り手」として―

台風第10号（2016年８月30日）

震災の教訓を生かした後方支援

統計史上初めて東北地方の太平洋側に上陸した「台風第10号」。日本の南海上を迷走し、2016年８月30日に大船渡市付近に上陸した後に岩泉町、久慈市、宮古市をはじめとする県北沿岸部に甚大な被害をもたらし、関連死を含め23人が犠牲となった。建設業界にとっては、東日本大震災からの復旧・復興事業の最盛期において、沿岸部の企業の多くが限られた人員や資機材をやりくりしながら復興需要に対応している中で発生した大災害だった。

特にも被害が大きかった岩泉町においては、岩泉雨量観測所で24時間最大雨量203㍉、時間最大雨量62.5㍉を観測。小本川や安家川などが氾濫し、家屋の浸水被害、道路の寸断などが発生している。

東北地方整備局岩手河川国道事務所と県土整備部から災害協定に基づく対応要請が行われたことを受けて、協会本部は８月29日より各支部に対応を依頼。台風上陸当日の８月30日には、災害対策本部を設置して各支部の情報収集などを行った。

その後、沿岸支部などから本部に対する要請事項などを確認し、対応を協議。９月２日には木下紘会長（当事）が岩手河川国道事務所と県土整備部に対して、工期延長への柔軟対応を要望するとともに、応援要請に対して協会として取り組む旨を伝えている。

この間にも現地では、久慈支部、岩泉支部、宮古支部、釜石支部などが、行政機関と連携しながら被災個所のパトロールや道路啓開、倒木除去応急復旧などに対応。岩泉支部では、会員企業の安否や資機材の被災状況を確認し、県や町からの要請に対してエリア担当を手配。出動が可能な企業は直接行政機関と打ち合わせをした上で、道路啓開作業などに当たった。

岩泉町内の災害廃棄物撤去

盛岡支部による国道455号復旧支援

国道455号の土砂撤去

協会本部では９月４日、正副会長による災害対策本部会議を開き、特にも被害が大きかった岩泉町において、岩泉支部を中心に復旧作業がスムーズに進められるよう支援することを決定。同日中に正副会長団が現地入りし、岩泉支部の工藤俊治支部長（当事）、久慈支部の税田英敏支部長と当面の対応などについて協議。岩泉町災害対策本部会議への岩泉支部の参画、久慈支部が安家地区の道路啓開に入る際の国交省との連絡調整、町への車両貸与などを本部が支援した。

台風10号への対応について正副会長団と岩泉・久慈両支部が岩泉町内で緊急の意見交換（2016年９月４日）

盛岡支部は、国道106号、国道455号、一般県道普代小屋瀬線などの啓開作業に入り、国道455号では24時間体制で対応。９月12日までに盛岡市～岩泉町間の全線を通行可能とした。

台風第19号（2019年10月13日）

土砂災害など新たな脅威が顕著に

東日本大震災と台風第10号災害からの復旧・復興の途上にある本県を襲った「台風第19号」。県内の公共土木施設の被害状況は、被害個所数は1011カ所、被害額は261億2900万円となった。この台風では土砂災害が多発したことに加えて、暗渠などの狭窄部に流木や土石流が滞積しての内水氾濫など、従来とは異なる災害の様相も見られ、本県における災害が多様化している状況も浮き彫りとなった。

普代村内の災害廃棄物撤去

10月11日の午前10時過ぎに、東北地方整備局防災室から協会本部に対して、協定に基づく協力の要請が出された。同日昼頃には三陸国道事務所から久慈支部、岩泉支部、宮古支部、釜石支部、大船渡支部、遠野支部に対する協力要請を行ったとの報告があり、これに基づいて協会本部から各支部に対応を要請。10月12日午前８時30分より災害警戒態勢を取り、沿岸地域を中心に広域かつ甚大な被害が発生していることを受けて、同日からの警戒態勢を正式な「災害対策本部」とした。10月15日に久慈市に土のう袋を１万枚、10月21日に普代村に1000枚、それぞれ久慈支部を経由して送っている。

各支部の動きを見ると、久慈支部の会員企業は、県北広域振興局からの依頼を受けて、国道281号などの担当路線でパトロールや道路啓開を実施。管内では被災個所が点在し、中小河川での被害が確

認されたほか、道路法面の崩落被害も発生した。普代村内では山側から大量の土砂が中心部に流入。会員企業や関係機関が連携し、土砂撤去を実施した。

宮古支部も道路啓開や応急復旧などを展開。宮古市内の重茂地区では一部道路が寸断されたことから、主要地方道重茂半島線（山田町～同市）などの道路啓開を実施。現地に向かう支援車両の通行を確保した。岩泉支部は、土砂流出があった国道455号の中里橋上流などにおいて道路啓開を実施。岩泉町からの依頼では、町道長内中野線などの道路啓開に当たった。田野畑村内では主要地方道岩泉平井賀普代線や村道が被災し、各種災害対応に当たった。

宮古第３トンネルのスノーシェッドの撤去状況【提供：三陸国道事務所】

釜石支部は、沿岸広域振興局や管内自治体からの要請に対応し、会員企業が被災状況のパトロールを実施。大槌川堤防の破損に対応したほか、土石流の撤去や流出防止対策、流木撤去に当たった。

このほか、東北地方整備局三陸国道事務所と同事務所の道路維持受注企業、復興道路などの工事従事者らは、管内の国道45号や三陸沿岸道路の応急復旧などに当たった。

新型コロナウイルス感染症対策

オンライン活用し、働き方改革と両立

新型コロナウイルス感染症の拡大防止に対応するとともに、会員間の迅速な情報共有と会員企業の利便性向上を目的に、20年度からＷＥＢ会議とＷＥＢセミナーのシステムを構築。12月２日から本格運用を開始し、同日午後にはＷＥＢセミナーシステムを使った初の講習会を実施したほか、支部長会議などにも活用している。

オンライン会議システムを活用した支部長会議

ＷＥＢ会議・ＷＥＢセミナーシステムの導入は、コロナ禍において感染症の拡大防止を図りながら、全県下での迅速な情報共有を図ることを目的とする。ＷＥＢ会議は時間と場所の制約を外すことでの柔軟な会議の運用を、ＷＥＢセミナーは受講機会の増加や会員企業の時間的・費用的な負担の軽減を図ることを目指す。

システム構築に当たっては、県内各支部の会議室にインターネット接続環境を整備。オンライン会議システム「Ｚｏｏｍ」を活用して、ＷＥＢによる会議やセミナーの実施を可能とした。

ＷＥＢ会議システムは、主催者が会議室用アカウントでログインして会議を設定。会議参加者は、通知されたＵＲＬをクリックして会議に参加することができる。支部の会議室でもインターネット接続が可能となっていることから、必要に応じて支部長や本部理事以外の支部役員が会議に参加できる。

支部長会議などにも活用を図っており、同年12月11には久慈支部をキーステーションとした支部長会議を行った。21年３月９日の災害情報伝達訓練では、本部と全支部とでオンライン会議を実施したほか、スマートフォンを使って現地の状況を報告し、全支部で情報を共有する訓練も行った。

ＷＥＢセミナーシステムは、オンラインによる研修会、講習会などを開くことができるもの。従来のように県内全域から大会場に集まる形ではなく、各支部を拠点として、建設研修センターから支部会議室などに配信する形を基本とする。ＷＥＢ形式のＣＰＳＤ認定講習も各支部で受講可能となっている。

情報伝達訓練にも活用

ＷＥＢ会議・ＷＥＢセミナーシステムの運用開始式（2020年12月２日）

建設現場における感染拡大防止に向けては、国土交通省が示す「建設業における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」と全国建設業協会が取りまとめた「地域建設業における建設現場の新型コロナウイルス感染症対策の実践」に基づき、各事業場ごとに対策を講じている。

日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震対策

最大クラスを抽出し、岩手県が浸水想定

2020年９月、内閣府が「日本海溝・千島海溝沿いの最大クラスの津波による浸水想定」の岩手県分を公表した。これによると、日本海溝・千島海溝沿いで最大クラスの津波が発生した場合、洋野町、久慈市、野田村、宮古市、釜石市の５市町村で役場庁舎が浸水するとのシミュレーション結果が出ている。最大沿岸津波高を見ると、宮古市の29.7㍍をはじめ、岩泉町26.6㍍、山田町21.9㍍、田野畑村20.9㍍と、20㍍を超える可能性が示されている。

岩手県では2020年度から、「津波防災地域づくり法」に基づく津波浸水想定の設定を進めている。同法に基づく津波浸水想定は、国土交通省が定めた基本指針に基づき知事が設定・公表するもので、避難対策や土地利用規制などの検討に資することを目的としている。

津波浸水想定の設定に当たっては、過去に発生した津波や発生が想定される津波を整理し、その中から最大クラスの津波を引き起こす断層モデルを設定する。岩手県の場合は、東日本大震災モデルや新たに公表された日本海溝・千島海溝モデルも含めた複数モデルの中から抽出する。

津波防災地域づくりに関する法律に基づく津波浸水想定にかかる市町村担当者会議（2020年６月19日）

技術的・専門的な事項についての方針を決定するため、県津波防災技術専門委員会の中に小委員会を設置。小委員会では、検討対象とする波源の抽出、計算手法や条件の確認などを行う。岩手県では津波浸水想定策定検討をコンサルに委託し、小委員会からの助言を受けながら、2021年度末の公表に向けて策定作業を進めている。

津波浸水想定を行った後に、知事は津波災害警戒区域（警戒避難体制を特に整備すべき土地の区域）または津波災害特別警戒区域（開発行為および建築を制限すべき土地の区域）を設定することができる。県の公表を受けて、市町村など関係機関では避難対策の見直しなどを行っていく。

建設業界でも、県や市町村の動きを見ながら、地域の安全・安心を守るために適切な対応を図っていく。

第5章
次世代の建設業を担う若い力

―僕たちの復興、これからのまちづくり―

私たちの仕事の成果が地域の安全に

■常に細心の注意を払いながら

当初は土木に対する思い入れが特段強いわけではなく、友人に誘われて土木コースを選んだという程度でした。就職も都会に出たいという思いがあったのですが、東日本大震災があったことで、地元で自分が貢献できることがあるのでは、勉強したことを生かせるのでは、と地元就職を意識しました。地元就職を勧めてくれたのは担任の先生。「都会は向かないんじゃないか」とも言われましたが。

就職してすぐは、仕事を覚えるために作業員さんと一緒に現場に入り、現場の流れなどを慣れながら覚えるという感じでした。消波ブロックの製作や新設、防潮堤や防波堤のかさ上げ、河川堤防の拡幅の現場にも携わることができました。私たちの仕事の成果、品質がそのまま地元の人たちの安全につながりますから、丁張一つを掛けるにも、コンクリート構造物の強度試験にしても、常に細心の注意を払いながら仕事をしています。

■指導する立場でも勉強と成長の途中

自分が管理技術者として現場を持つようになり、上司や発注者の方としっかりと打ち合わせができた時、少しは自分も成長しているのかなと感じます。私はいま28歳で入社９年目ですが、当社は若い社員が多く、20代が８人。現在担当している現場も私より若い社員ばかりで、後輩に指導する場面も増えてきましたが、私自身も勉強と成長の途中です。

目標とする上司から学び、作業員さんたちが安心して楽しく働いてもらえる現場づくりができるよう、「彼の現場なら安心、大丈夫」と言っていただけるようになりたいです。そのためには、管理だけではなく作業員さんの仕事の流れや動きも学んでいきたいですし、身に付けることは沢山ありますね。

兼田建設㈱（久慈市）
植野和真さん

社会的に必要とされる仕事

■まずは目の前の仕事に一生懸命

出身地の田野畑村では、主な就職先は一次産業や建設業で、土木の仕事が身近にある環境でした。東日本大震災が発生したのは高校２年生の春休み中。実家は高台にあり被害は受けなかったのですが、地元の建設企業が道路啓開作業をしている様子は見ていました。

もとから地元で働くことで、地域のために役立ちたいという思いがありました。これは東日本大震災とは関係なく。ところが県立産業技術短期大学校水沢校の建築設備科を卒業して、現場に配属されてみると、まずは仕事を覚えて目の前の仕事をこなすことに精一杯で、「震災復興を通して地域のために」と考える余裕はなかったですね。国道106号の道路改良、赤前の災害公営住宅の造成、神林の防潮堤工事などでベテランの現場監督の補助を担当して、いま思えばそこで覚えたことも多かったです。

■もっと現場の基本を学んで

建設業の仕事は、通常のインフラ整備のほかにも、維持管理、災害復旧、除雪など、社会的に必要とされる仕事であり、その成果が目に見えるという魅力があると思います。個人的には、建設ＩＣＴなど新しい技術を使った仕事ができることが面白いですね。

ここ数年は国道106号の災害復旧や三陸国道事務所などの現場で現場代理人を担当させてもらっていますが、私の場合はどうしてもパソコン操作や書類作成、ＩＣＴなど内業の仕事が先行しているので、もっと現場自体の根本の部分を勉強する必要があると感じています。ベテラン職員の現場での段取りや、想定外の事項への対応力など、本当にすごいと思いますので、災害時など突発的な事項に対応するためにも、経験を積むことで現場の基本を学んでいきたいと思っています。

刈屋建設㈱（宮古市）
奥地裕介さん

教科書通りの正解はない仕事

㈱青紀土木（釜石市）
雲南勝志さん

■積み重ねの中で現場のイメージが

高校卒業後は地元での就職のため、建設業とは別の仕事をしていました。震災の後は内陸で勤務しながら休みの日にはこちらに戻ってくるという生活を１年ほど続けていたのですが、地元に何か貢献できないかなど考えることがあり、先輩から建設業を勧めていただき、現在の会社で働くことになりました。

最初の現場は山田町の漁港で、代理人の手元をしながら測量や書類整理を担当していました。工業高校の土木科を出ているとは言っても、卒業後は別の仕事をしていましたし、実際に現場で働きながら仕事を覚えたという感じでした。基礎的な勉強はしてきたものの、図面を見ても説明を聞いても何もイメージができず、指示されたとおりに動くだけ。現場で仕事を積み重ねていく中で、図面を見て、現地と照らし合わせながらイメージできるようになってきました。釜石市内の道路新設工事で大規模な切り土をする現場が、転機になったと感じています。

■自分の評価より「みんなでつくる現場」

現在の現場で、初めて現場代理人を担当しています。建設の仕事って、教科書通りに一つの正解がある仕事ではないと思っています。現場条件は常に異なりますし、代理人さんたちそれぞれの考え方もあり、多くの選択肢の中から判断していく仕事です。自分自身が経験を積むだけではなく、ほかの会社の現場を見ることで、以前は気付かなかった作業の意味を一つずつ学んでいるところです。

自分が考える建設業の魅力は、道路など完成した施設が多くの人に利用されてること。出来上がりに満足するのではなく、人の役に立ってこそだと思います。仕事をする上でも、自分への評価よりも、「みんなでつくる現場」という思いが強いですね。

地図に残る「ものづくり」の仕事

豊島建設㈱（大船渡市）
村上渡さん

■一つ一つが新しい体験

ちょうど大船渡で仕事を探していた時期で、地元消防団の関係者から今の会社を紹介していただきました。当初は地域への貢献というより「まずは何か仕事を」という気持ちの方が強かったですが、被災した地元のためにという気持ちはみんな同じだったと思います。最初に入ったのは自宅に近い末崎での災害廃棄物撤去の現場。現場では悲しさを感じるよりも、目の前の大変な状況を何とかしようという思いで動いていました。

初めて建設現場に配属されたのは８月のお盆明けから。陸前高田市広田のほ場整備でした。全くの未経験者なので、測量の手元や丁張掛けなどゼロから教えてもらいました。10年間で多くの現場を経験しましたが、同じような現場は二つとなく、一つ一つが新しい体験です。

■毎日の仕事をひたすら積み重ね

建設業はものづくり。しかもその成果は地図に残り、グーグルアースで世界中から見ることができます。理屈抜きにすごい仕事ですよね。思い出に残っているのは大船渡市吉浜で市道の橋梁工事です。延長は30～40㍍ほどの短い橋梁ですが、その橋があるから地域がつながる。自分にとっても嬉しい経験でした。

自分としては、特別に大きな目標は無くても良いのかなと思っています。大きい現場でも小さな現場でも、与えられた毎日の仕事をしっかりと仕上げ、それを１週間、１カ月、１年とひたすら積み重ねていくことの繰り返しなのかな。特にも今は、道路維持の主任技術者を担当しているので、地域の人たちにとっての当たり前な状態を維持していくことの繰り返しが大切です。振り返れば、30代は震災復興とともにあっという間でした。きっと40代もあっという間なんでしょうね。

沿岸支部のタイムカプセル事業紹介

県建設業協会釜石支部青年部会のタイムカプセル事業でカプセルにメッセージを入れる釜石小卒業生（2012年２月８日撮影）

県建設業協会釜石支部青年部会がタイムカプセルを返却（2020年１月12日撮影）

タイムカプセルを支部会館に保管する県建設業協会大船渡支部青年部会（2013年３月２日撮影）

県建設業協会大船渡支部青年部会がタイムカプセルを返却（2020年１月12日撮影）

県建設業協会大船渡支部青年部と同釜石支部青年部は、被災地の子供たちが未来へのメッセージを伝えるタイムカプセル事業を実施。11年度の小学校卒業生が20歳を迎えた20年の成人式で、カプセルの中身を返却した。自分宛ての手紙などを受け取った新成人たちは、震災当時を振り返りながら、郷土の復興へ気持ちを新たにしていた。

大船渡支部青年部は「建設業ふれあい事業」の一環として、11年度から毎年、気仙管内の小学６年生を対象に「二十歳の君へプロジェクト」事業を展開している。毎年３月に、集めたタイムカプセルを支部会館に保管。カプセルの総数は、20年度までの10年間で2559人分に達している。

この事業は、被災地沿岸の子どもたちに未来を思い描いてもらうことで、自分の将来像を今後の人生の目標にしてもらおうと企画したもの。20年の成人式会場で、初回に保管されたカプセルから、自分宛ての手紙などを受け取った新成人は、幼い頃を懐かしみつつ、郷土の復興に向けて決意を新たにしていた。

釜石支部青年部は、管内小中学校の11年度卒業生を対象に、「建設業ふれあい事業」に替わる元気回復プロジェクトとして、20歳の自分へメッセージを残してもらおうと事業を企画。カプセルは、当時の小学６年生と中学３年生が、12年２月に埋設した。中学生分については、17年の成人式で渡している。

20年の成人式では、釜石市と大槌町の式典会場で、青年部会員が事前に取り出していたカプセルを贈呈。釜石の会場となった市民ホールＴＥＴＴＯでは、振り袖やスーツ姿の新成人が、受付ロビーで思い出の品を受け取り、仲間同士で小学生時代の思い出話に花を咲かせ、復興への思いを新たにしていた。

「復興」そして「国土強靱化」へ

…巻末の辞に代えて

東日本大震災から10年。発災直後の道路啓開からはじまり、応急復旧、本復旧、復興事業へとステージの変遷に合わせて、私たち建設業界も多くのことを学びました。そして震災復興が一段落した現在、国が進める「防災・減災、国土強靱化のための５か年加速化対策」に基づく社会資本整備がスタートしています。

一方、宮城県沖地震の発生確率は30年以内に60～70％と依然として高く、日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震発生も懸念されています。国内に目を転じると、南海トラフ巨大地震（Ｍ８～９クラス）が30年以内に70～80％、首都直下地震（Ｍ７程度）が30年以内に70％程度など、巨大地震の発生が切迫しています。また毎年のように台風や豪雨などに起因する洪水、土砂災害が発生し、災害列島の様相を呈しています。

私たち地域建設企業は地域の守り手として、東日本大震災、16年台風10号、19年台風19号など、度重なる災害からの復旧・復興に向き合ってきました。この間、衛星携帯電話など情報伝達機器の充実、土嚢やブルーシートの備蓄、資材商社や建設機械リース業との連携強化などの対策も図ってきました。

長期的な公共事業費の減少、若年労働者の確保と育成、働き方改革への対応など多くの課題と直面する中にありますが、私たち地域建設業は、本県における社会資本整備の担い手、災害時の地域の守り手としての自負を持っております。今後も発生が懸念される災害からの復旧・復興、そしてこれからの国土強靱化に向けて、行政機関や地域住民とのコミュニケーションを図り、連携を取りながら「地域とともに歩む建設業」としての社会的責任を全うできるよう、今後とも精進してまいりますので、変わらぬご指導とご鞭撻のほど、お願い申し上げ、巻末の辞に代えさせていただきます。

岩手県建設業協会　震災10年記録誌
伝えたい想い　ふるさと岩手の未来へ
東日本大震災から10年　被災地復興のいま

編集委員一同

伝えたい想い　ふるさと岩手の未来へ
東日本大震災から10年被災地復興のいま

発行日
2021（令和３）年９月30日

発行人
一般社団法人岩手県建設業協会
会　長　向井田　岳
〒020-0873　岩手県盛岡市松尾町17番９号
電　話　019－653－6111
ＦＡＸ　019－653－6113

印刷・編集
㈱日刊岩手建設工業新聞社
〒020-0015　岩手県盛岡市本町通３丁目９番33号
電　話　019－623－8201
ＦＡＸ　019－623－8204

写真撮影　渡邉常道、稲垣千万人（㈱日刊岩手建設工業新聞社）